



Title	ウッドストックの政党組織
Author(s)	小川, 晃一; OGAWA, Koichi
Citation	北大法学論集, 22(2), 1-62
Issue Date	1971-09-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16123
Type	departmental bulletin paper
File Information	22(2)_p1-62.pdf



論
説

ウッドストックにおける政党組織

小川晃一

第一節 選挙区政党との関係

第二節 党大衆組織と党員

第三節 党委員会

第一節 選挙区政党との関係

自由党はウッドストックに党支部をもたないが、保守、労働の二大政党はこの町に党支部をもち、それぞれウッドストック保守統一主義者協会、ウッドストック地方労働党とよばれる。後者の労働党組織についていえば、それは近

辺の部落をもおっている組織であり、ここにいうウッドストック¹つまりウッドストック投票区²よりもより広い範囲での組織である。この町の部分をおおう党組織はウッドストック地区³労働党⁴と呼ばれるべきものであるが、町以外のところには見るべき党組織はないので、実際にはウッドストック地方労働党とはめったに区別されない。町は一九世紀までは議席をもつ独自の選挙区であったが、一八八五年の選挙法改正により議席を失い、以来より大きな選挙区のなかの一投票区になってしまった。ウッドストックが含まれる選挙区は現在北オックスフォードシャー（ないしバンベリー）選挙区であり、選挙区単位の政党組織はそれぞれ、北オックスフォードシャー選挙区保守統一主義者協会、北オックスフォードシャー選挙区労働党と呼ばれる。ウッドストックの二つの政党はこれら選挙区政党の支部にあたる。

英国の政党の地方組織のなかで中心的なものは選挙区レベルでの組織であるということが出来る。これは英国の政党組織がそもそも選挙戦のために形成されたという歴史的背景によるであろう。ある著者によれば「この国における政党組織の最初のねらいは、ある一定の政治的意見をもつ有権者の登録を促進し、同じ意見をもつ議員の選出を確実ならしめることにあった」のである。現在でも地方政党の最も重要な党活動の一つは選挙戦での活動であるといつてよい。この選挙区で選挙区労働党の党組織が保守党の選挙区政党の党組織にかなり劣っている理由の一つは、労働党候補が近い将来当選する見込みがうすく、活動家たちが党組織の拡大をそれほど深刻には進めようとはしていないということにある。

もっとも協同組合党、共産党その他は選挙区を重要な党組織の単位とはしていない。集権的な政党として共産党を例にとれば、その地方組織の単位は選挙区ではなくて、市町村や工場であり、この単位が地方支部として中央ないし地域からの集権的な統制に服しているのである。選挙のときには臨時の組織が選挙区単位にその都度つくられるだけ

である。

大政党の党組織が選挙区単位につくられているという意味は、選挙区よりより広い地域でのレジヨナル組織が選挙区単位の組織ほど重要な役割をもっていないということでもある。保守党はイングランドとウェールズを一二の地域に分け、それぞれの地域に、地域評議会、執行委員会とその諮問委員会、及びエイジェント等の党機関をおいている。例えばオックスフォードシャーはバッキンガムシャーやバークシャー等六つの州とワイト島とともに第一〇地域のウェセックス地域組織に属している。こうした地域組織は中央でつくられたものであって、ここにおかれるエイジェントも、中央事務局と選挙区の間で媒体ではあるが、中央党組織からの出費で維持されており、中央事務局からの仕事を地域で処理するのである。下から、つまり選挙区党組織からのイニシアティブでその連合体として組織された地域組織もあるが、保守党の場合にはその数は少ない。中央から組織された地域組織と選挙区の連合体として組織された地域組織が二元主義的に並存しているのは労働党の場合である。即ち、一方では中央から、全国は一一の地域に分けられて組織されており、オックスフォードシャーは第一一地域の西部ミッドランド地域に含ましめられている。これに属している州は保守党の範囲と全く異なっており、例えばとなりのバックスやバークス二州はこれに含まれない。他方、選挙区政党の連合組織は保守党の場合よりもはるかに多い。これらは大部分一つの州に属するいくつかの選挙区の連合体で、州単位の地域組織といってもよいくらいである。こうしたものは極めて有用であるにちがひなく、とりわけいくつかの選挙区からなる大都市の連合組織はそうである。⁽⁶⁾

労働党の場合をとってみよう。市労働党が存在するときには、市の労働組合支部は——有名なバークミンガムの例を除けば——市のなかの選挙区労働党にはあまり関心をもちなくなる傾向が強い。たとえば、組合支部は普通市労働党に加盟はしても選挙区労働党に加盟しないし、代議員は市の党評議会には出席しても選挙区の委員会(GMC)には

あまり出席しなくなるという。⁽⁷⁾市労働党が最も有効な活動をするのは市議選のときであるが、それ以外のときには普通それは実際的な政治活動にあまり熱心ではない代議員がたまる談話会になってしまう。ウイルソン委員会はこれに批判的であり、党の公集権化⁽⁸⁾がいくつかの都市では地方労働党の衰退をもたらしているとし、市政党が公調整委員会⁽⁹⁾のごときものになるのでなければならぬとしたのである。

こうして大都市の市政党の場合には複雑であるとしても、一般的にいえば、選挙区政党はこうした地域単位の組織に比べてさらに重要な役割を果しているといつてよい。その重要性は、中央や地域の組織からの指導はうけるが指令はうけず、広範な自律性をもって選挙その他の活動を行なっているということにある。⁽⁹⁾候補者の選択には選挙区政党は大きな自由をもっているし、個々の選挙戦の進め方でも中央区からのアドバイスはうけるが、選挙区政党や候補者は自由に戦術を立てるのであつて、⁽¹⁰⁾その結果選挙区によって相当幅のある選挙戦の個性がでてくるのである。また、選挙区政党は独立した財政をもち、中央政党との党費の関係を直接処理しているし、エイジェントを公雇用⁽¹¹⁾し彼の給料を支払っているのである。選挙区政党は、全国政党に団体加盟しているグループとともに全国大会に代議員も送る。もっともここでは、それほど決定的な役割を演ずることはできない。

選挙区政党よりより小さい単位の党組織も重要である。それは、保守党の場合には地区組織、労働党の場合には地方及び地区組織である。労働党の公地方⁽¹²⁾党組織は選挙区が広く人口が散在している公州選挙区⁽¹³⁾においてのみ存在し、公都市⁽¹⁴⁾選挙区⁽¹⁵⁾には存在しない。地方組織の下に地区組織があるわけではあるが、都市選挙区では選挙区労働党のすぐ下に地区労働党がくる。地区組織（以下これに地方組織も含めることにする）の活動は極めて活発であつて、一般の有権者及び支持者と直接かつパーソナルに接するのはこのレベルにおいてである。従つて地区組織は政党が一般有権者と接する尖兵ないし触角であり、これに比べると選挙政党が彼らと接するのはより間接的である。こうして

最前線にあって活動する地区組織と選挙区政党との関係は、一線に分隊とそれらを指導し統合する公前線將校の關係である。選挙区保守党のエイジェントにしばしば退役將校がなるのも不思議ではない。

選挙区政党組織の中心は、保守党では執行委員会、労働党では一般管理委員会（以下GMCと略す）である。選挙区内の地方・地区政党が代議員を派遣するのはここである。各地区組織のほかに、婦人部の支部や青年部、それに保守党の場合にはさらに保守党クラブ等が、労働党の場合にはいうまでもなく労働組合等が代議員を送る。この委員会はいずれも、選挙区レベルの党組織の決定機関、いわば公議會であって、形式的に言えば選挙区内の最も重要な機関である。とくに労働党のGMCは公主権的な權威をもっているといえよう。

北オックスフォードシャー労働党は九つの地方労働党に分かれ、それぞれ書記以外に一名のものが代議員としてGMCに送られる。このほかこの選挙区では一五ほどの労働組合が選挙区労働党に加盟しそれぞれ代議員を送っている。この選挙区にどれくらい労働組合（及び協同組合）の支部があるのか正確には調べることができなかったが、その数は五、六〇を下らないのであり、従って労働党に加盟しているのはそのなかの一部（四分の一ないし五分の一くらい）にすぎないのである。このように選挙区労働党に加盟する組合の数が少ないのはなにもめずらしいことではない。例えばグロソップの調査においても、町にある三五の組合支部のうち労働党に加盟しているのはわずか六つにすぎないとされているのである。北オックスフォードシャー選挙区でのGMCに送られる代議員の数は全体で五〇名ほどである。これは大きなGMCの構成とはいえない。しかもこの委員会に出席する代議員も多くはない。七〇年総選挙直後に開かれた委員会に集まった代議員の数は、正式のものでも半数以下の二〇名そこそこにすぎず、普通でも二五名くらいであるといわれる。この選挙区に限られないが、労働組合の代議員の出席はとくに悪く、普通四、五名にすぎない。委員会も三月に一度開かれるにすぎず、毎月一度開かれているオックスフォード市のGMCに比べると、

その活動は活発とはいえない。都市選挙区と比べて集まるのに不便だからであろう。しかし、集会は普通三時間以上とかなりながく続き、議長によれば出席者の半分以上はなんらかの発言をするという。私が傍聴した会でも討論は極めて活発であり、採決もひんばんに行なわれた。もともとの政策についての採決はほとんどなされたことがないという。

保守党はほとんどの選挙区においても細目の規約をもっていない。保守党組織はなによりも「ソシアル」な組織であって、中産階級のソシアルな伝統に従って運営されているのである。それが「政党」と呼ばれず、「アソシエーション」と呼ばれているのもゆえなしとしない。「これらの社交的な組織は明確に中産階級の雰囲気をもっており、中産階級のクラブの趣味と価値観をもつものは間違いなく歓迎される」⁽¹⁴⁾し、それらをもたないものは、正式の決定により締め出されることはないが、社交的な「絶交」によって疎んぜられるのである。

労働党の管理委員会は異なった事情をもっている。委員会内での議論はかなり激しいし、代議員たちには労働階級のものばかりではなく中産階級のもの加わっており、しかも後者は極めて活発である。労働階級の代議員は労働党の労働者の伝統と広範な労働階級の支持層を背景にして党内に強力な発言権の基礎をもっているが、委員会内での議論においては、中産階級の代議員は彼らに劣らずに、むしろ彼ら以上に活発であり、会をリードさえしているのである。⁽¹⁵⁾委員会の統一性はたして可能であろうか。このことは最も深刻な問題となるにちがいないのである。一般のクラブにおいては異なった階級のもの伝統的に「ミックス」してこなかったし、それぞれは異なった社交的伝統をもって独自に生活しているのであるが、労働党という「任意団体」においてはこうした伝統の（相違）はどのように作用しているのだろうか。政治原則への捧身及び「同志的」結合意識はたしかに人びとを協力せしめているであろう。しかし、それだけでは会の統一や運営はできないのである。現在ではとくに、中産階級の多くの労働党活動家は、労働者の

活動家とちがつてかつてのように労働党が公労働者の党⁽¹⁾であるとは考えていないのであり、労働階級への捧身の意識は変容しつつあるのである。しかしながら、少なくとも北オックスフォードシャーのGMCに関する限り、党の統一はかなりよく保たれているように思われる。統一を支えている要因はいくつもあるが、そのなかでやはり、英国のチームやクラブのエートス、とくに中産階級の伝統を無視することはできない。代議員たちはほとんど公顔見知り⁽²⁾の間柄であり、議員を始め激しい討論をする場合でも彼らは互いにファースト・ネームで名ざしあい呼びあうのである。

一般管理委員会以外での選挙区政党レベルでの党活動はまず、この委員会の執行部の活動があり、議長、書記、財務等執行部を構成している人たちは党の有力者であつて、委員会の運営は勿論のことその他の広範な党活動においても十分なリーダーシップを発揮できる。

とくに選挙区にはエイジエントがおり、彼は日常の党務を整理し、選挙区全体の各層の党活動と不断に接触している。ウッドストックの保守党議長は、六六年選挙前の一年間に、保守党候補とは——彼が議員でありロンドンにいることが多いということもあつて——五、六回しか会っていないが、バンベリーにいるフルタイムのエイジエントには一五回ほども会つている。解散が不断にうわさされていたためであろうがこれはかなり多い回数である。他方、労働党の方はエイジエントと議長の接触はそれほどもなく四、五回ほどにすぎなかつた。グロソップその他の町や村が山岳地帯に散在しているハイピーク選挙区の保守党エイジエントの例では接触は極めて頻繁で、彼は一九五三年頃の調査では、選挙区内の各エイジエントと二、三日おきに電話連絡をとつていたし、グロソップのエイジエントは町の幹部党员とは殆ど毎日電話連絡をとつていた。この点では彼らは北オックスフォードシャーのどのエイジエントよりもはるかに活動的であつたといえよう。

北オックスフォードシャーにおいて、六六年選挙当時は保守、労働両党ともフルタイムのエイジエントをおいてい

た。もっとも労働党がフルタイムのエイジエントをおくようになったのは一九六五年からであるし、七〇年選挙当時はフルタイムではなくバンベリーの労働党町議が選挙戦の間だけパートタイムのエイジエントになった。これに対しこの選挙当時保守党はフルタイムのエイジエントの外に三名のフルタイムの書記をも雇っており、労働党に比べればその有利さには格段のちがいがあった。こうした違いは他の選挙区でも普通であり、たとえばオックスフォード市では、労働党はフルタイムのエイジエントが一人であるのに対し、保守党はフルタイムのエイジエントのほか五名のフルタイムの書記をつかっていた。保守党は資金的にはるかにめぐまれているのである。北オックスフォードシャーでは一九七〇年开始フルタイムのエイジエントが辞めて（理由は後述）以来、かわりを探すのに苦慮している。近辺の地方紙は勿論のこと、ステイツマン紙やトリビューン紙にまで広告をのせたが、いまだに（八月）見つけられないのである。政治的情熱には余り期待できなくなった近年、低い給料では適当な人物をさがすことはできなくなったし、低い給料でさがし当ても若く活動的なものはすぐに職を変えてしまうのである。退役軍人であるこの選挙区の保守党エイジエントが比較的安定して仕事につとめているのに対し、労働党のエイジエントはこの五年間に三名もかわり、二年以上続いたものがない。保守党のエイジエントにはよく退役将校がなっており、退役将校は職務感や組織・運営能力においてこの仕事にとくに向いているように思われる。

英国の政党はよく、集権的によく組織された大衆政党のモデルとされている。わが国の政党等と比べればこのことは確かにいえるであろうが、多くの論者はこのさいしばしば英国の政党の集権的性格を強調しすぎるように思われる。英国の政党がそれほど集権的でないことは選挙区政党が中央政党組織に対してもっている広範な自律性をみてもわかる。まして、党組織が官僚的であるとしたり、官僚制的（合理性）を徹底せしめているとしたりすることは大きなあやまりといわねばならない。労働党の（官僚的性格）は（新左翼）の人びとによりとり上げられるテーマである

が、党組織を文字通りの意味で党官僚機構とみたり党官僚機構による集権的組織とみたとすれば、彼らの意見はあやまっているといわざるをえない。選挙区や地区労働党の意見が中央で容易に取り上げられないとき、若い彼らはしばしば党組織を公官僚的¹⁹⁾と行って批判するのであるが、そこにはしばしば感情的な反発がみられる。党中央部は党官僚機構を通じて指令や指示で動かし、とすることはできないのであって、党中央部は権威をもち²⁰⁾アドバイス²¹⁾によって指導はするが、党中央部と地方組織とはそれぞれがいに独立的な側面を多くもっているのである。前者の意向が後者によく滲透する場合にも、官僚機構による²²⁾おしつけ²³⁾ではなくて、地方党組織の自発性や²⁴⁾同意²⁵⁾にもとづいているとした方がよからう。党中央部の権威がゆらくときには中央のアドバイスも従われなくなるのである。英国の政党組織は集権的によく組織されているが、集権化も極端ではなく、また党官僚機構によるものでもない。

こうしたことは政党組織におけるアマチュアリズムをみればわかる。地方党組織でいえば、党²⁶⁾官僚²⁷⁾の末端にいるエイジェントの選挙区政党内での地位や役割をみればよい。

エイジェントの地位は、彼が選挙区政党によって任命され給料を支払われるということに最も具体的に示されている。彼は選挙区政党のサーバント、具体的にいえば執行委員会のサーバントなのである。階級からいっても、選挙区政党の幹部と比べてより高いとはいえないし、党有力者の一部よりはかなり低いといわねばならない。²⁸⁾北オックスフォードシャーの保守党のエイジェントは退役将校であり比較的高い階級に属する（上層中産階級）が、労働党のエイジェントは六六年調査当時ではもと郵便局員であって労働者に近いし、七〇年調査の直前までのものはもと中学校教師（中層中産階級）で、労働党のエイジェントとしては比較的階級が高いが、それでも彼より高い階級の労働党活動家は少なくはないのである。とくに六〇年代には中産階級、それも比較的高い中産階級の若い人びとがかなり多く労

説
働党の活動家になったのである。

論

選挙区での党の決定はあくまでも公アマチュアが党員ないし公アマチュアが党幹部がなし、エイジエントはいかに有能であろうとこれを補佐する立場にあるにすぎない。彼は党中央部との関係をより多くもっているからその関係での情報をより多くもつてあろうし、選挙区内の政党の種々の集まりに出席するから選挙区内の政党の事情やそこで起る政治的出来事について——社会的出来事さえ——より多くの情報をもつてあろう。従って委員会での彼の発言は実質的には重んぜられ影響力をもつにちがいない。しかし彼は委員会のメンバーではなく決定権はもたない。また、エイジエントには公よそのがが多く、選挙区内の政治的出来事についての一般的情報はともかく、その公機微に亘ることがらは十分に知ることができないであらう。英国の政党は選挙区レベルにおいてさえ、互いに知り合った人間関係の微妙なネットワークでなり立っているのであって、地方社会ではこの人間関係に通じることは社会・政治生活の運営に不可欠なのである。この点でもエイジエントは不利な面をもっている。彼がもし党中央からの指令で動くとするなら、彼はこうした関係のネットワークから公浮き上がってしまふ。こうして選挙区政党の組織や運営においても英国の伝統的なアマチュアリズムがみられるのであり、それは現に有効に機能もしているのである。

私を知った四、五名のエイジエントは、いわゆるブライドの高い人物ではなく、近づき易く気楽に話しかけうる公スキのある態度を示す人たちであつたし、またあまりにもてきぱきと仕事をし人間関係を処理するタイプの組織人でもなかつた。党指導層もどううタイプの人物がエイジエントとして適任かをよく知っており、エイジエントとしての不可欠の条件を提示している。「エイジエントは常に明るくかつ笑顔をみせていなければならない。馬鹿な人間に会つても喜んで迎えなければならない。少なくともそうみえるようにしなければならない。人の顔や名前を絶対に間違えずにおぼえていなければならない。苛立ったり怒ったりしてはいけない。不規則な時間に食事をし食事

をしなげらばう大な仕事をすることができなければならぬ。底抜けに如才なくなければならぬ。選挙戦には候補者に自信を与えてやらなければならぬし、敗れたときには、候補者は可能な限り多くの票を集めたのだということを彼に信ぜしめてやれねばならぬ⁽²²⁾。エイジェントは無限にハニス・マンでなければならぬのである。

こうしたナイス・マンは勿論少くないであろう。北オックスフォードシャーでは七〇年選挙当時労働党にはフルタイムのエイジェントがいなかったが、これは辞めさせられてしまったからである。有能で若き三二才のもと中学校教師のエイジェントは自分自身で政治的意見を持ちこれを表明しすぎ、党の各層とまさつを起こしたからであった。中学校教師であった彼は地位からも能力からもこの選挙区のエイジェントとしては余すぎた人物であったのかもしれない。しかもうわさによれば、あげくの果に彼は選挙区の労働党候補になろうとさえした。彼は人間関係に失敗したばかりではなく、エイジェントの限界をはるかにふみ越えてしまったのである。

地方党組織において選挙区レベルの政党が最も重要であるとしても、それより下の地区政党組織も最前線の小隊としてそれに劣らずに重要である。しかも、それは選挙区政党からかなりの独立性をもち自律的に活動しているのである。州選挙区の場合には、バラーを選挙区とするバラー政党と違って支部をなす地区政党が一箇所に集まっしてしばしば会合を開くことは地理的に困難であるから、より分権的になり易いであろう。しかしバラー選挙区政党の場合でさえも、活動の基礎は大てい地区政党である。選挙区政党組織への地区からの代議員たちは常に各地区の党組織を頭において行動するといわれる。ランカシャーのある選挙区の労働党組織を調査したある著者は、「労働党は、各段階の代表の集まりがより下の段階の組織のために一体的に行動するというピラミッド型の代議体ではなく、もろもろの集団の連合体であり、下部集団からの不断の支持があつてのみ維持される⁽²³⁾」ようなものである。

地区政党は、選挙区政党からかなり独立的で自律的なものであり、この独立性・自律性をもって有権者一般党员と不

断に接触しながら活動する最前線部隊なのである。これは、のちにのべるごとく、英国の党組織や党活動が公まだパーソナルな接触到に依存しているためでもあり、そのいみで地区政党组织は代替性のない役割を果しているのであって、党活動全体のうちで不可欠の部分となしているのである。

地区政党の活動の比重について（労働党の場合）、ある論者は極めてよくまとまった論述をなしているので、ここにそれを引用しておこう。

理想的な政党とは、すべての地区に大勢の黨員をもつ能率の高い組織をもち、出席のよい会合を規則的に開き、若い人々のなかから不断に黨員を獲得し、すべての選挙で規律ある行動にふりむけられるような政党である。選挙時には、一般的な指示は選挙区政党、バラード組織、選挙特別委員会等から出されるけれども、実際の活動が行なわれるのは地区政党のレベルにおいてである。地区組織は委員会室をさがしてここに人をおき、ほう大な数の封書にアドレスを書き、文書類をくばり、キャンペーンのチームを動かしてゆく人々をみつけないければならない。選挙のないときでも、黨員獲得のためにキャンパスしたり、党費を集めにまわったり、もしの知らせやパンフレットをくばったり、一般の黨員が通常出席できる会合を開いたりするために、一般の人々ときめのこまかい接触をする責任を負うのもまた地区組織である。地区組織はまた、ダンスパーティー、社交的集まり、ピクニックなども計画しなければならぬ。最もよき政党の最も良き地区組織はこうした様々の活動のために五〇人から一〇〇人の人々の援助を求めうるであろう。しかし多くの人々の活動は六人前後の人々の捧身をもまねばならないのであり、それぐらいの捧身の人がいなければならぬ。最悪の地区組織ではこうした活動は全く行なわれていない。

選挙区政党の諸機関、G・M・C、その執行委員会は地区組織から（加盟労働組合支部からでもあるが、普通は地区組織からの方がはるかに重要である）メンバーをひき出さねばならないからよき地区組織がなければよき選挙区政党もありえない。少なくとも理論的には、すべてのことがらでのイニシアティブは地区組織からくる。それらは政党幹部、国会議員候補、地方議会議員候補等を最初に指名する。G・M・Cによって承認された後、選挙区政党の名前で、年次大会、地域会議、トランスポート・ハウスの投書箱、首相、地方新聞に送付される決議を最初に行なうのも地区組織である。

こうした理想的な地区組織はめったに存在しないであろう。後にものべるように、多くの場合、「組織上の責任と決議のイニシアティブをとることがこのように地区組織に課された課題であるとしても、六人、一〇人、二〇人、五〇人の会合で、組織的な側面に時間が費され、はるかに重要な決議が適切な討論もなく知識の不十分な人々によって通ってしまう」⁽²⁵⁾のである。しかしこのことは、選挙区レベル（例えばGMC）でもそれほどにはちがわないのである。⁽²⁶⁾

ウッドストックの保守、労働二党の各支部は選挙区内の党組織においてきわめて重要な位置を占めている。党組織のない自由党は別である。一九世紀末の選挙制度改革以前に北オックスフォードシャーで議席をもっていた町がウッドストックとバンベリーのみにあつたという歴史的背景もあるが、現在では他の要因がより重要になつた。

有権者数や支持者がそれほど多くないにもかかわらず、この町の保守党が重要であるのは公爵家があるためである。公爵家は全国的にみても過去の保守党の歴史のなかで顕著な役割を果たしてきたし、一九世紀末以来の歴史をとつてみても、このことはわがらう。保守党指導者の一人になつたランドルフ・チャーチルや彼の息子ウインストン・チャーチルは公爵家の一門でこの町に生れた（二人の墓もある）し、ランドルフの方は二回もこのウッドストック選挙区から選出されたのであるし、公爵家のブレネイム・パレスはしばしば保守党の全国的な集会の場所となつた。⁽²⁸⁾現在公爵も北オックスフォードシャー保守党の会長であつて、その集会はしばしばパレス内で開かれるし、総選挙のときの保守党候補の採択会はかならずここで行なわれるのである。このいみでは、町の保守党が重要であるというより、公爵家のプレステッジが高いのである。選挙運動の公エフィシエントな面での中心はバンベリーである。

ウッドストック労働党も選挙区内の労働党組織のなかで極めて重要な位置を占めており、選挙区内での党活動の中心は、北部ではバンベリー、南部ではウッドストックであるといわれている。七〇年選挙当時GMC議長は町からの

ものであるし、財務委員も隣り村に住むウッドストック地方労働党の委員である。ウッドストックからの代議員もGMCのなかで大きな発言力を持ち、代議員を通じて提出されるウッドストック労働党の提案はいつも殆ど無条件で通っている。GMCの議長はウッドストック労働党の書記であるし、代議員の一人は七〇年調査当時はオックスフォード大学のあるカレッジのフェローをしている経済学者であった。バンベリーが労働党組織で重要なのはいうまでもなく労働党支持者が多いためである。管理委員会への代議員も多く、たとえば、七〇年選挙直後に開かれた重要な場合には、二五名ほどの出席者のうち一〇名ほどがバンベリーからのものであった。パートタイムのエイジエントになったものもバンベリーの町議である。一方、ウッドストックにおける労働党支持者は七〇年選挙当時は五〇〇名をそれほどこえていないのであって、選挙区内での労働党票の五パーセントにみたない。労働党支持者の数という点からすれば、ウッドストックはバンベリーは勿論のこと、ウィットニー、キドリントン、チップング・ノートンに劣るであらう。バンベリーには多くの労働者がいるが、この町にはあまりいないのである。他方、オックスフォード市に近い州南部、ウッドストックやキドリントンにはインテリヤ中産階級の活動家がかなり多く、ウッドストック労働党が有力なのはこうした層に支持されているからである。管理委員会に出席する代議員をみても、全体としてみれば労働階級に属するとみられるものが多いし、バンベリー地区からの代議員はとくにそうであるが、南部からの代議員の多くはインテリヤ中産階級の人びとであって、ウッドストックはその典型なのである。⁽²⁹⁾ 彼らは会で数的に劣っているにもかかわらず、発言力は大きく、会を十分にリードしうるのである。

第二節 党大衆組織と黨員

英国の政党は多くの大衆黨員をもつ大衆政党であるといわれる。わが国の大きな政党と比べればそのことは紛れもなく正しい。たとえば、五九年の選挙における保守、労働両党の得票はそれぞれ、一三七五万票、一二二二万票ほどであるのに対し、黨員数はそれぞれ、二八〇万名、八〇万名（個人加入黨員のみ）ほどであつて、黨員は、保守党の場合四ないし五名の投票者に一名、労働党の場合には一三ないし一四名につき一名の割合といふことになる。組合を通じて党費を払つていたものを含めると、労働党の黨員数は六三〇万名ほどで、支持者の半分ほどのものが公黨員といふことになる。六四年選挙直後バトラー氏たちはランダム・サンプルにもとづいた調査をしているので、その結果を紹介しておこう。「あなたはこの一年党費をおさめましたか」といふ質問に対し、おさめたと回答したものは英国全体で一四％であつた。うち保守党におさめたとしたものは五三％で半分以上、労働党におさめたとしたものは四〇％、その他であつた。労働党におさめたとしたもののうち、五九％は労組を通じてであり、三三％が地方労働党の黨員として、また八％は双方を通じておさめた人たちであつた。従つて労組を通じてのみおさめているものを除くと、党費をおさめたものは、英国全体で約一割、保守党で七％ほど、労働党二％と少しである。またこの調査では、保守党に投票したとしたものは三六％、労働党が四一％ほどであるから、ここから計算してみると、黨員は、保守党の場合五名に一名ほど、労働党の場合には一八名に一名ほどとなる。

普通には保守党系の政党は大衆黨員をあまりもたないのであつて、この点英国の保守党の大衆政党的性格はとくに顕著な特色といえるであらう。たとえば、保守党の黨員の割合は、アデナウアー首相時代のキリスト教民主同盟の黨員の割合の一〇倍以上も大きい。労働党の場合には、西ドイツ社会民主党の黨員の割合と比べて殆ど異なるので

説
ある。

論

ウッドストックの党員数をみよう。七〇年選挙当時この町の労働党党員数は、党書記によれば、三七名であった。町の労働党投票者は六〇〇名ほどとみられるから、党員は投票者の六%ほど、一五、六名に一名の割合ということになる。七〇年選挙直後行なったランダム・サンプルによる調査で私は、バトラー氏たちの調査と同じく「あなたはこの一年政党に^{サブスクリプション}党費を^{おさめたか}」と質問した。おさめたとしたものは労働党に投票した四九名のうち五名で、一割ほどにあたる。これは実数にすると六〇名ほどとなり、党書記がいった三七名よりもずっと多い。この差は勿論統計的でありうべき誤差によるのかもしれないが、それ以外になお考察すべき問題を残している。家族のうち誰かがおさめたとか、あるいは選挙戦のための^{ドネーション}金^{をした}とかの場合にも、「党費をおさめた」と回答したものがあり、そのため^{ドネーション}金^{をおさめた}と回答したものがより多くなっているのかもしれない。従って党費をおさめたといえる人の割合は調査にあらわれたものよりも実際にはより小さくなり、党書記があげた人数により接近するのかもしれない。しかし^いちがいの可能性はそのためばかりではないと思われ、この点英国の政党組織の性格にも関係する問題なので、すぐのちに改めて論ずることとしたい。

保守党の場合には、党の正式の役員から党員数をききだすことができなかった。保守党の方が一般的により秘密主義なのである。従ってランダム・サンプルによる調査にもとづいて推量するほかない。質問に対し党費をおさめたと回答したものは二九名であつて、保守党に投票したと回答したものは九〇名ほどであるから、三名に一名の割合ということになる。英国全体をみても保守党党員の割合は労働党員の割合よりかなり高いのであるが、これは労働党の場合に比べてはるかに高い割合である。⁽⁶⁾この場合にも労働党員についてのべたのと同じく、家族の誰かが党費をおさめたとか、選挙戦のための^{ドネーション}金^{をした}とかの場合にも、「党費をおさめた」と回答したものがあり、実際に党費

をおさめたものは少なくなるにちがいない。それにしても保守党党員の割合は極めて高いといわねばならないのであって、町の保守党は選挙前の少なくとも一年間は極めて活発な党活動をなしてきたにちがいないのである。

英国の政党は極めて多くの大衆党員をもちしかもよく統合された大衆政党であるといわれるが、この点においても誤解のないようにしなければならぬ。一般の党員が活動的ではないというよくいわれることがらや、英国の政党が厳格な党規律を課する全体主義的な政党のようなものではないということは、ここでは一応別にしよう。そもそもそれ以前に誰が党員であるかということ、党員と党員でないものとの区別は——クラブの会員の場合と同様——それほど明確ではないのである。町の労働党の書記に党員数をたずねたとき、彼は明確に答えたが、選挙区的一般管理委員会の議長でもあるこの書記は、党のマネジャーとしてむしろ公例外的に有能なのであって、たいがいの党役員は党員数の概数も知らないのである。私は各党の多くの役員にそれぞれの党の党員数を質問したが、大ていは公わからぬといふか、公正確な数字をあげなかつた。七〇年選挙当時、自動車産業を退職した七八才の労働者役員は当時党員数はふえつつあるとしながら約五〇名ほどとこたえている。町の労働党の議長にも党員数をきいたが、彼さえ公正確な党員数をいわず、安定した党員数が四〇名から五〇名ほどであるとするだけであつた。議長によれば、この人数は「町の労働党のハード・コア」である。一体どの人数が公正しいのであろうか。党の役員さえ党員の公正確な党員数をいえないということは、保守党の場合ともかく、それが秘密であるためではなからう。またおそらく無知のためばかりであるまい。そもそも党員数というものは公正確に数えることができないものであるまいか。これを説明してみよう。

まず第一に、そもそも党員の定義は明確ではないし、明確に規定することもできないのである。明確な規定がないのは、そう規定しても実効がないからである。通常の党員は積極的な党活動を全く期待されておらず、町の労働党議

長によれば、この町の党活動はせいぜい活動的、な党员一四、五名で十分なのである。二つの党ともこの町では党员の年次大会というものは開かないし、保守党の場合には党主催の社交的集まりがもよおされるが、年一度あるかないかで、しかも近年は開かれていない。一般の党员に關する限り、党費をおさめること、ぐらゐが党员であること、のほとんどすべてである。

党员は党費をおさめねばならないし党費をおさめるものには党员証が与えられることになっているから、党費をおさめたものが党员であると、か党员証をもつものが党员であるとかと一応はいえるかもしれない。例えば労働党憲章（第二条二項）にも党費を払うものが（個人）党员とされている。しかしこのことから公現実の党员数を計算するのは容易ではなく、正確に計算することなどは不可能に近い。選挙区労働党は、選挙区内の党员数をなんらか算定し、党中央で一人あたりの党費のミニマムの額で、その数だけの党员証を公買するのであるが、それが公党员によって現に公買されるか、どうかはわからないのであって、選挙区政党はリスクをおかさねばならないのである。中央で発表される公式の党员数はこうして中央で公売れた党员証の数によっているのであり、現実の党员数はそれと同じではなく、通常はそれよりも少ないのである。選挙区政党の幹部は選挙区内の種々の事情を考慮して中央で買った党员証を公売らねばならず、売れない分は——一定の制約があるが——なんらかの操作によってうめてゆかねばならない。こうして現実の党员数は公式の党员数とは異なるのであって選挙区政党内の種々の事情や操作によって曖昧・不正確になってしまふのである。保守党の場合には選挙政党の操作の範囲はより広い。ウイスト・ドライブやその他の催しによって金を集めるのもこうした操作の一環であり保守党の常套手段である。

党費をおさめるものでも、金額を完全におさめるものはそれほどはいないのであって、どれくらいおさめたものを党员に数えるか、どれくらいおさめた人にどのような時期に党员証を渡すべきか、またどれくらい納入を怠った人を

党員からはすべきか、このようなことは全国一律に定まっているわけではなく、また中央の党組織が一律に決めることも適當ではないとされているのである。結局は選挙区政党が操作的に決めており、労働党の場合には年額の半分以上をおさめたものがよく党員とされる慣行である。保守党の場合にはさらに柔軟であろう。慣行がある場合には、党員数はそれに従って一応は数えることができる、しかし党費の納入は規則的なされるわけではなく、集める人がいつどのような間隔でまわるかによってきまるのであり、その時期はまちまちである。しかも短期間——半年間ぐらい——での公党員数の変動の幅は極めて大きく、ある時期に党員数がなん名であるかを知ることが、地区政党のよいうな小さい組織においても極めて困難なのであって、ある時点での党員数の正確な数字というものはありえないといつてよいのである。複雑な事情はさらにある。選挙区政党は党で定めた党員一人あたりのミニマムの党費の額をさらに低める操作もしており、例えば選挙区労働党が退職者の党費の額をミニマムよりもさらに低めるのはごく普通である。北オックスフォードシャーの労働党も一九六五年こうした操作を行なったのである。

とところで、年額の半分をおさめたものが党員として数えられているとか、選挙区政党でどのような操作がなされているか、一般の党員は知っているわけではないから、党役員に党員数をきく場合と、ランダム・サンプルによる調査で質問する場合とは、党員数に違いがでてくることは当然といわねばならない。例えば一九五〇年当時のグリニッチの調査の場合をみてみよう。労働党党員をみると、役員にきいた人数は六三名で、ランダム・サンプルによると五七名である。労働党では役員にきいた人数の方が多いが、保守党の場合には逆に、四八名と五八名で、個々の公党員に質問した方が多い。このくいちがいは、著者によれば、保守党の場合には党員は年一シリング以上とされており労働党月六ペンスとちがって月々に集められることがなく自分が党員かどうかあいまいになってしまし、保守党は党活動を固有の政治活動に限らず、ガーデン・パーティやウイスト・ドライブ等社交的な催しをよく開き、こ

うした催しには党員以外のものもかなり多く加わるが、党費をおさめているものでなくともこうした催しにしばしばくるものは自分を党員と思ひこんでしまふということによるのである。そうした人びとは党からは党員として数えられないのである。

党員数を確定することがむずかしいのは以上のような理由によつてばかりでなく、党員数、あるいは党費をおさめるものの数がたえず変動しているということにもよる。つきにこのことについて説明しよう。

一つの選挙区をとつてみても党員数にはたえず変動がある。ニューカースルの例をとつてみよう。⁽¹²⁾戦時中からのこの町の労働党党員数の増加には目ざましいものがあり、とくに一九四七年一月フルタイムのエイジェントが雇用されて党員獲得のすさまじい運動が展開されて以来はそうであった。一九四九年には党員は前年より六〇%増して一〇〇〇名以上に、一、二年後にはさらに二〇〇〇名にもふくれあがったのであった。労働党への投票者は一万二〇〇〇名ほどであるから、そのうちの六分の一ほどが党員になったことになる。この選挙区内のある地区では増加はとくに目ざましく、一九四七年から一九四九年までで、二二名から二三九名と、二年ほどで一〇倍以上に膨脹したし、もう一つの地区では一四名から二〇五名とさらに大きな倍率で増加した。⁽¹³⁾六〇年代始めの自由党の上げ潮のときには、ロンドンの郊外住宅地であるフィンチュリーでは自由党党員数の膨脹は目ざましく、一九五九年には一〇〇〇名ほどであった党員は一九六四年には四〇〇〇名となり四倍にもふくれあがった。⁽¹⁴⁾各党がせり合つて党員獲得の競争をしているときにはこのようなことはそれほどめずらしいことではない。⁽¹⁵⁾一般支持層のなかには党への強い公忠誠心⁽¹⁶⁾をもつ「レギュラー」が多く、彼らは比較的容易に入党する「潜在的な」党員層をなしているのである。党費は党員が党支部に取めに行くのでなくて、党活動家が集めに廻るのであり、潜在的党員が入党するかどうかは活動的な党員がドアをたたかどうかにほとんどかかっているといつてよい。従つて党員数は、有能で熱心なエイジェントや党

各選挙区における党員数（1958）

名目上の党員数	選挙区の数
800	157
900~1000	87
1000~2000	234
2000~3000	80
3000~4000	29
4000以上	13

の勧誘をなし党費を集める活動家がいるかどうか、彼が個人的友人を多くもち社会的信用をもつ人物かどうか、党員が留守のときもう一度党費を集めに廻るほど彼らに熱意があるかどうか、こうしたことよって決定的に左右されるのである。ウッドストック保守党の場合にはながい間、婦人（看護婦）の財務委員がほとんど一人で党費を集めて廻り、ある時期には一人で一〇〇名ほどから集めたこともある。この保守党財務委員が年令その他の理由で活動できなくなるに従い、党の収入は漸減してしまった。労働党議長によれば、六〇年代始め労働党が増加したのは中産階級の若い活動家が増えたからであった。党員数は急激に増えるばかりでなく、急激に減少もする。労働党議長によれば、ある時期に党員獲得運動に力をいれ急速に党員数をふやすことは比較的容易であるが、一人入党した人をなかく党員として維持しておくのは困難で、たいていは「二、三カ月」で脱落してしまうのである。このことは一般にいわれているし、彼自身一九六一、二年の頃つぶさに経験したところであった。ウッドストックや近辺の部落にも、一、二年前までは数年間多くの党青年組織があったが、六六年選挙当時にはいずれの党のものも殆ど消滅していた。

党員の数は「よきフルタイムのエイジェントがいること、多くの時間をささぐる熱心で有能な党員がいる」かどうかにかかっている⁽¹⁶⁾とすれば、党員数は選挙区によってかなり異なることにもなる。事実その通りである。例えば、一九五八年の選挙区労働党の党員数の状態は表のごとくであり、一〇〇〇名から二〇〇〇名⁽¹⁷⁾の間の選挙区が最も多く、これが平均的なものともいえようが、それでも全選挙区の四割にみたない。グリニッチにおいては各地区によって党員の割合はかなり異なっており、しかも著者によれば、それぞれの地区の党員数

は党の得票数や、有権者の社会的性格にはそれほど関係しないのである。⁽¹⁸⁾

党員数は、絶えず増減するばかりでなく戦後の時期を長期的にみても大きな振幅で変動している。労働党の個人加入党員の数は五〇年代に次第に減少した。⁽¹⁹⁾五五年選挙直後には、H・ウィルソンの議長の下に党組織を検討する労働党委員会がつくられ、この委員会は五五年選挙の敗北を政党组织の欠かん、党員の減少に求めたことはあまりにも有名である。

これに対し、六〇年代前半は労働党の党員数が増加した時期である。五九年選挙での三度目の敗北が党组织の再建を促し、党員獲得の努力を促進せしめたのである。一九六一年一〇月には全国執行委員会は、党首を含んで九名からなるキャンペーン委員会をつくり、党组织の改善にのりだした。一九六二年初めには、二五の地域会議をひらき、地方活動家に地方組織を改善し新党員の獲得を促進するように説き、新党員獲得の目標を一〇万名と定めた。この目標は達せられなかったが、一九六二年には一万六千名の党員をうることができたのであり、これは一九五七年来の初めての増加であった。当時の党组织の再建運動はとくに若い活動層の働きによつたように思われる。このことは労働党の青少年組織化がより活発に進められたことにも現われている。五九年選挙後直ちに新しい全国的な青年組織である「青年社会主義者」が形成され、一九六〇年には五七八、一九六一年には七六九の支部が結成された。⁽²⁰⁾一九六一年には既にこれらの組織の全国大会が開かれるまでに到っている。労働党は若い党員と満足な関係をもつたことは一度もないといつてよく、三〇年間に三度も青少年組織を解体せざるをえなかったほどである。組織や大会は「トロッキスト」に攪乱されたが、結局「イデオロギーの純潔」と「理想」に対して「実現可能なもの」にバランスが傾くようになったのである。⁽²¹⁾とくに労働党が選挙に勝つことが見通され、「左翼的傾向」をもつとされた有能なウィルソンが党首になるに及び、青年組織には「理想の禁欲」が勝るようになったのである。

CND youth の政治団体所属

所属政治団体	人数 (%)
Young Socialists	105 (24)
Young Communist League	71 (16)
Anarchist	45 (10)
その他	25 (5)
なし	200 (45)
	445 (100%)

Parkin, middle Class Radicalism, p. 162.

この時期は公核兵器^{ユニセラテリズム}の一方的廃棄^{ユニセラテリズム}運動やCND運動が最も華々しい時期でもあった。これらの公過激な^{ユニセラテリズム}運動は労働党の回復にどのくらい貢献したであろうか。これらの運動と労働党ないし党指導層の関係は微妙であり、正式には双方は互いに公独立の^{ユニセラテリズム}立場をとった。しかし、この運動に加わった労働党党員は多く、とくに青年党員においてはそうであった。これらの運動を介して党員となったものもかなりいるにちがいない。ある調査によれば、CNDに加わった若い人びとにはいづれの政治団体にも所属していないものが多い(四五%)²³が、所属団体では労働党が最も多く、全体の四分の一ほどを占めている。もし、一六才以上の青年をとってみるなら、青少年社会主義者に属するものは半分近くなるであろう。このうちかなり多くの人々はCND運動に加わることを介して労働党に入るようになったに違ひなく、上掲表サンプル(一〇五名)のうちの六三%は、CNDに加わった後に、または加わると同時に、青少年

社会主義者に加入したとしているのである。水爆²⁴に対する反対運動が彼らの最初の政治活動だったといえるかもしれない。こうしたきっかけで労働党に加入した若ものたちのうちのかなりのものは、労働党の党組織のなかに定着し、やがて持久力のある党活動家になったものも少なくないであろう。

六〇年代始め絶頂にあったユニセラテリズムやCND運動は以後急速に衰退してしまった。一九六三年には、形式的にはともかく実質的には密接な関係にあった労働党、とくに密接な関係にあった労働党指導層もそれから離れ始めたし、六四年選挙においてはユニセラテリズムは労働党により争点としては全く取り上げられなかった。²⁵CND自体、一九六五、六年までには核兵器問題からヴェトナム問題へと力点を移してしまった。しかし、ヴェトナム

問題がかつてのユニラテリズムやCNDの運動ほどに多く若者たちを動員できたかどうか疑問である。

そもそも、もともと組織性や政策論的志向のうすい心情的な若者が多かった運動のなから、どれくらい労働党の党組織になじめるものが出たかはなはだ疑問であり、そうした運動を通じて労働党組織に定着するようになったものはおそらくごく一部にすぎなかったであろう。²⁶六〇年代前半労働党の党組織を拡大していった活動家は、こうした運動に加わっていた大部分のものはちがったタイプのものであったろう。CND運動が華々しかった時期には、目立たなかったし、またそれらの運動に刺激されたり鼓舞されたり、影響もされたであろうが、運動に直接加わった人と、とくに大部分の人びとほどには感情的ではなく、またそれほど過激でもなかった。彼らは公技術をもった若者であり、出身階級もCND運動に加わった多くの人びとよりも低かったかもしれない。この運動には多くの上層階級の人びとが加わっていたのである。²⁷公技術をもったこの若者たちは、プラグマチックでドライな公マネジャー型²⁸のフェビアンタイプである。当時の労働党組織化の尖兵になったのはこうした人たちであった。

ウッドストックの労働党の党員数も以上のような全国的な傾向を反映している。前労働党議長によれば、一九六一年のある時期には公党員数²⁹は急速にふえ実に一五〇名ほどにもなったのであった。この急激な増加は主として四、五名の活動的な党員の努力によるものであったが、なかでも中産階級に属する二〇才代前半の二、三人の若い活動家の目ざましい貢献によるものであった。一人は医師婦人であり、もう二人は現書記でかつ選挙区のGMC議長夫妻である。彼らは多かれ少なかれCND運動に影響されたが、それ以前からすでに活動家となっていたのである。²⁹

ところが、これほどにふくれあがった党員を維持するのは容易なことではなく、議長によれば数カ月後には公党員³⁰数は半減してしまつたのである。六六年選挙当時は党員数は三、四〇名であり、かつて有力であった町の公青年社会主義³¹も消滅してしまつていた。しかし六〇年代始め活動的であった若い党活動家はその後もお一貫して活発

であり、現在も党活動の中核となっている。六四年選挙の直前からは移住してきた若き測量技師が加わり、六六年選挙前から同じく婦人設計技師が加わって、六六年選挙当時町の労働党組織・活動は絶頂に達したのである。町の党書記はやがて選挙区G.M.Cの議長にもなった。しかし以後七〇年選挙までの時期は町の労働党も停滞したように思われ、一時党員数は二〇名代にさえおちこんでしまったのである。七〇年選挙までには党勢をもりかえしたが、前選挙のときほどの勢力にはもどらなかった。

労働党とは逆に、町の保守党は六六年選挙当時、党の組織や活動において——労働党に比べて——かなり停滞していたが、それ以後七〇年選挙の頃までにかなり活発になっていった。七〇年調査で示された支持者三名につき一名という党員の割合は実際よりやや高く現われていようが、当時党員数が非常にふえていたという事実は多くの人により認められているところである。保守党組織の拡大は恐らく全国的な傾向とも一致していたにちがいないが、現書記の活動的な努力に負うところが極めて大きかったといえよう。町の保守党協会の議長となった公爵のエイジェントの下で、電気技師夫人（下層中産階級）のこの書記は活動的に動き、七〇年選挙のときなどは彼女が住む新住宅地の住民のほとんど全部の（一一〇戸）を戸別訪問し、彼らの投票意図をほぼ完全に把握していると公豪語したくらいであった。六六年選挙で全く戸別訪問しなかったという前書記とは大きな違いである。党員数の伸びは彼女が書記になってからの一年半ほどの間であるといわれ、党員には若い婦人層がふえ、この層への働きかけがとくに成功したと思われる。⁽³⁰⁾

つぎに党員の社会的特徴をみてみよう。扱う対象は七〇年調査のとき「この一年党費をおさめた」と回答したものである。サンプルが小さく（四三名）結果の統計的意味はあまりないと思われるが、党員はともかくも自ら公進んで党員となったと想定できるので、一般の有権者とは違った扱いをなしうるであろう。党員は一般の有権者と比べ

てどのような特徴をもっているであろうか（一表）。

党員の性格 I

	ウッドストック	ダービー
党員の割合	22%	11%
性別		
男	19%	12%
女	29%	11%
年齢		
24才以下*	8%	4%
25～34	17%	7%
35～44	14%	11%
45～54	38%	14%
55才以上*	25%	17%
階級		
中産	33%	18%
労働	16%	8%
投票		
Con.	32%	19%
Lab.	10%	9%

* ダービー市の調査ではそれぞれ16～24才まで、55～69才までである。本調査で55～69才までのものをみると28%である（注）。

有権者中の党員の割合は二二%で極めて高く、五名に一名の割合である。六四年選挙当時のバトラー氏たちの調査では英国全体で一四%であるから、これよりもかなり高い。とくに割合が高いのは、男性一九%よりも女性二九%、四五才から五四才の年齢層三八%、中産階級の人びと三三%、保守党に投票した人びと三二%である。とくに低いのは、二四才以下の若年齢八%、及び労働党に投票した人びと一六%である。

こうした結果と比べうる調査はごく少ないが、

そのなかではダービー市のものが最も適当である⁽³¹⁾。ダービー市の調査結果と類似していることから、党員が保守党支持者や中産階級の人びとのなかに多いということであり、労働党支持者、労働階級の人びとのなかの割合のいずれも二倍ほどである。ところが、性別での割合をみると、ダービー市では男女で差は殆どないが、ウッドストックでは女性のなかでの割合の方が極めて高い（男性の一九%に対して女性の二九%）。年齢層でみると、ダービー市では年令が高くなるに従って党員の割合は高くなる。このことは一応グロソップでもみられ、面接された九〇名中三〇才以下が六名、四〇才以下をとってみても二二名で四分の一ほどにすぎない。ウッドストックにおいても、四〇才以下のものは四三名中一〇名で四分の一ほどにすぎないが、年齢が高くなるに従って党員の割合も高くなるとはいえず、と

くに四五才から五四才までの中年層のなかの割合が三八%と圧倒的に高いことが目立っている。

党員の割合もウッドストックの方がはるかに高く、ダービー市の二倍もある。実際ダービー市の一一%という割合は六四年選挙当時のバトラー氏たちの調査での割合一四%よりも低いのである。しかし、労働党党員の割合だけをみたならば、ウッドストック(一〇%)もダービー市(九%)も異ならないのであって、ウッドストックの方が高いのは保守党支持者のなかにおいてであり、ダービー市の一倍半もあるのである。ダービーの調査は一九五三年になされその著者によれば、保守党はこの市でも一九四五年以来選挙区政党の組織の拡大を強力に進めてきたのであるが、七〇年選挙当時のウッドストックでの党員の割合はさらにはるかに高く、これによってみても、当時まで町で保守党がいかに活発な党活動を行っていたかがわかる。保守党支持の婦人に対してはとくに党員獲得の運動が活発になされたに相違なく、婦人党員が党員の三分の二を占めている。四〇才以下のものも多く(婦人保守党員の三分の一ほど)、比較的若い婦人層にも働きかけが成功したことがわかる。現在の保守党書記は社会的・政治的に極めて活動的な四五才の婦人であって、婦人党員の増加は彼女の働きかけによるところが多いであろう。

つぎに、可能な限り、二大政党の党員の社会的性格を比較してみよう。党員の階級をみると(Ⅱ表)、保守党党員は九割が中産階級、労働党党員は九割が労働階級に属するとみられ、党員の階級的性格は非常に強いといえることができる。この町では保守党投票者中に中産階級の人が占める割合は六四%、労働党投票者のうちで労働階級に属する人が占める割合は七八%ほどであるから、党員の階級的性格は投票者のそれよりもかなり強いということになる。

党員の階級について他の調査の結果と比較してみよう。比較できる調査としては、一九五〇年選挙当時のグリニッチ選挙区⁽³⁴⁾、一九五三年当時のグロソップ⁽³⁵⁾、一九五九年選挙当時のニューカースル選挙区⁽³⁶⁾等である。

一九五〇年選挙当時においてグリニッチ選挙区の労働党員の階級構成をみると、労働階級に属するものが圧倒的に

グリニッチ党員の階級

階級 (ホル・ジョースの分類注にもとづく)	Con.	Lab.
Av. + } 1~4	15	2
Av. } 中 産	52	9
Av. - } 5~7	28	77
D. K. } 勞 働	5	12

グリニッチ党員の階級意識

	Con.	Lab.
中 産 階 級	57	—
下層中産階級	17	3.5
勞 働 階 級	16	95
D. K.	10	1.5
	100%	100%

グロソップ党員の階級

	Con.		Lab.	
	一般	党員	一般	党員
ビジネス	10	19	1	7
専門・管理	17	28	4	—
ホワイトカラー	22	14	18	17
産業労働者	50	39	77	76
	100%	100%	100%	100%

多く、ほぼ九割を占め、中産階級の人々は非常に少ない。これはグロソップ、ニューカースルにおいても同様で、産業労働者は労働党員のそれぞれ七六%、七七%である。いずれのものも事務員やホワイトカラーを含めておらず、このなかにも労働階級とみうるものはかなりいるはずであるから、彼らをも含めてみるなら労働階級に属するとみられるものはいずれの町でも八割をこえるにちがいない。保守党党員のなかでは、いうまでもなく、いずれの調査でも中産階級に属するものが多く、グリニッチでは六七%、グロソップでは六一%、ニューカースルでは八二%である。こうしてこれらの調査においても党員の階級的性格は極めて強く、この点でウッドストックの場合と共通している。

しかし、数字を比較してみる限り、ウッドストックの政党党員の階級的性格はこれらの調査と比べてもかなり強い

有権者と党員の階級意識 II

	Con.		Lab.	
	一般	党員	一般	党員
中産階級 [△]	62 (67)	24 (77)	17 (35)	2 (20)
労働階級 [△]	12 (13)	1 (3)	23 (47)	7 (70)
D.K.その他*	18 (20)	6 (20)	9 (18)	1 (9)
	92(100%)	31(100%)	49(100%)	10(100%)

* 「その他[△]」は「階級は存在しない[△]」というような回答である

ニューカースル党員の階級

	Con.	Lab.
経営者	31	2
専門・管理	33	8
事務	18	13
労働	14	42
非熟練	4	35
	100%	100%

ニューカースル党員の階級意識

	Con.	Lab.
上層中産階級	3	1
中産階級	51	12
下層中産階級	24	5
労働階級	11	73
D. K.	11	9
	100%	100%

ということになる。ウッドストックでは政党を通じた階級対立[△]が強く、そのことが党員の階級の性格に現われているとみるべきであろうか。これを検討する一つの材料として党員の主観的な階級意識をみてみよう。

員の場合には七七%が中産階級に属するとし、労働党党員の場合には七〇%が労働階級に属するとしている。これを一般の保守党投票者の場合の六七%、労働党投票者の四七%と比べると、いうまでもないことであるが、党員の方が階級意識はより強い。とくに労働党の場合にはそうであって、労働階級に属するとしたものは、労働党支持者においては四七%と半分以下であるのに対し、党員では七割ほどにもなっているのである。一般の労働党支持者のなかから

党 員 の 階 級 意 識

	Con.		Lab.	
	グリニッチ	ニューカースル	グリニッチ	ニューカースル
中 産 階 級	57	54	—	13
下層中産階級	17	24	3.5	5
勞 働 階 級	16	11	95	73
D. K.	10	11	1.5	9
	100%	100%	100%	100%

労働党党员を除けば、労働階級に属するとしたものの割合は四割ほどとなってしまう。

グリニッチとニューカースルの調査においても党员の階級意識の調査がなされており、これらのものと比較してみよう。グリニッチでは自分を労働階級に属しているとみている労働党党员は九割五分以上であって圧倒的に多いし、ニューカースルでもその割合は七三%と若干低くなっているが、それでもかなり高い。ウッドストックでは七割であつてこれらに比べてより低い（もつともサンプルの大きさからいって正確な比較はできない）。保守党党员の場合に、自分を中産階級とみているものは、グリニッチでは七四%、ニューカースルでも——中産階級に属されている割合が非常に高いにもかかわらず——ほぼ同じく七八%である。ウッドストックの場合には七七%であるから、これらと殆ど異ならない。こうしてみると、ウッドストックにおける党员の階級的性格はかなり強いといえるけれども、党员の階級意識はそれほどではなく、比較された他の二つの町の党员の場合に比べて、弱いとはいへても強くないのである。

党员はどれくらい政治党活動に積極的なのであろうか（Ⅲ表）。七〇年選挙において「選挙戦中に選挙に関するテレビをかなりよく見た」としたものは、一年間保守党に党費を取めたとした二九%のうちでは約半数の一五名である。労働党党员の

保守党<党員>の政治活動 III a

	<党員>	<非党員>
強く支持する	17 (59)	18 (29)
よくテレビをみた	15 (52)	11 (18)
ステッカーをはった	12 (41)	7 (11)
演説会に出席	8 (28)	3 (5)
国有化反対	27 (93)	46 (73)

労働党<党員>の政治活動 III b

	<党員>	<非党員>
強く支持する	5 (55)	15 (37)
よくテレビをみた	4 (45)	7 (17)
ステッカーをはった	4 (45)	6 (15)
演説会に出席した	—	2 (5)
国有化支持	3 (33)	8 (20)

場合には九名中四名でやはり半数ほどであった。また選挙で家ないし自動車の窓に候補者のステッカーをはったとしたものは、保守党党員中では約四割、労働党党員中では約半分であった。この二つのことに関する限り両党の党員の活動には相違がない。しかし候補の演説会への出席には大きな相違があり、保守党党員では出席したものは党員中の三割近く、二八％であるが、労働党党員で出席したとこたえたものは一名もいなかった。⁽⁸⁾

働二党の投票者中それぞれ一八％、一七％、ステッカーをはったとするものは一一％、一五％、演説会に出席したものは五％、五％である。これらを党員の場合と比較すると、相違はいずれの党でも顕著である。保守党においてはテレビをよくみたとするものは、党員、非党員で五二％、一八％、ステッカーをはったものは四一％、一一％、演説会に出席したものは二八％、五％で、労働党の場合には、四五％と一七％、四五％と一五％、〇％と五％である。こうして党員はそうでないものよりも、平均すれば、政治的にはるかに活発であるということがわかる。

党に対する支持の度合も党員とそうでないものとの相違は大きい。「保守党(ないし労働党)を非常に強く支持する」としたものの割合は、保守党の場合には六割ほどと三割ほど、労働党の場合には半分以上と三分の一そこそこである。こうして党員とそうでないものとの開きは大きいとはいえるが、いずれの党でも政治・党活動での開きほどに

は大きくはない。一般の支持者のなかには、政治・党活動はそれほど行なわないが、強く党を支持しているものかなりいるのであろう。

二大政党の公政策論で伝統的に最も顕著な相違がみられた国有化についての黨員、非黨員の意見をみてみよう。保守党黨員は大部分の九三%が国有化に反対であり、意見の傾向は極めて顕著である。これに対し、労働黨員の場合には、一般の支持者よりは国有化論を支持するものは多いが、それでもそれを支持するものは三分の一にすぎない。いずれの党でも国有化に支持を与えていないものがマジョリティを占めている（あるいは国有化を支持するものがマイノリティである）のであって、黨員のレベルにおいてさえも二つの党の公政策論の伝統的な対立はそれほど強いものではないのである。一般の支持者と比べて黨員間での公対立はたしかにより大きい。黨員の場合国有化を支持しない保守黨員の割合と支持する労働黨員の割合は九三%と三三%（かりにこれを合計すると一二六%）であるが、一般支持者の場合は七三%と二〇%（九三%）である。しかしいずれの党においても国有化を支持しない意見がマジョリティを占めているのであるし、この伝統的な二大政党の対立点でも黨員と非黨員の相違はそれほど大きくはない。このことは公支持の強さの場合と並行して考えられる。

黨員は一般の支持者よりも政治・党活動により積極的であるということはできたが、それほど積極的でないものもかなりいる。選挙戦中においても、テレビをよくみるものは半分ほどにすぎないし、ステッカーをはらないものは半分以上であるし、演説会に出席したものは保守党でも三割にみたないし、労働党黨員では会合に出席したものはサンプルには一名も現われなかったのである。党を公非常に強く支持するものとしたものも半分そこそこにすぎないのである。

選挙区政党内の組織は、団体加入黨員と異なり、自ら「積極的に加入することを選んだ人たち」であるはずだか

ら、より熱心な党活動家であろうと想像するものもあるかもしれない。しかし、ウッドストックでもみられるように、事實は必ずしもそうではなく、公デモクラチックな~~党~~党組織を誇る労働党にしてからがそうである。一般黨員の政治活動がかつてより活発ではなくなったのか、活動的な黨員の数が減少したのか、それとも、そもそも活動的な黨員が常にごく少数に限られていたのかは、慎重に検討を要するところであるし、また時代による相違や波があるうが、大衆黨員の大部分が活動的であったことはおそらくないであろう。⁽⁹⁾

政党の大衆組織が果してどのていど重要なのか、いままでにもくりかえし議論されてきたし、いままでになされた議論の大部分は黨員の多くは積極的ではないということであった。労働党議長によれば、ウッドストックでの党活動は活動的な黨員がせいぜい一四、五名もいれば十分なのである。党資金の寄与者ということ以外は一般黨員の役割というものはあまりないのである。党資金の寄与者という役割にしたところで、労働党においては労働組合の寄与の方が圧倒的に重要であり、それに比べれば選挙区労働党の比重はずっと小さい。保守党の党資金にしても、黨員からの党費収入以外の、党の社会的活動に依存する度合いは依然として大きいのである。⁽¹⁰⁾ また、大衆組織が選挙戦でどのていどの効果をあげているかについても疑問がもたれており、それが選挙の結果にあまり大きな影響を及ぼすものではないという議論はすでにかなり一五年以上も前からでている。⁽¹¹⁾ パトラー氏たちによる英国総選挙の一連の分析においても、党組織が改善された選挙区において改善されなかった選挙区でよりも公プラスの票が得られていないということが明らかにされている。⁽¹²⁾ たとえば、六六年総選挙の結果を分析して氏たちは「地域の党役員が目ざましい党組織の改善があったとしている選挙区においても、スウィングは隣接選挙区でのスウィングよりもその党に有利に動いたとはいえない」とする。⁽¹³⁾ 北オックスフォードシャーのすぐ隣りのバッキンガム選挙区で候補者の書記をしている婦人は七〇年選挙直後北オックスフォードシャー選挙区のGMCに出席し、バッキンガム選挙区では全国でも指折り数え

られるほどによく労働党組織を拡大・整備し北オックスフォードシャー選挙区での党組織よりもはるかによく完備せしめたが、それでも保守党へのスウィングをよりよく防ぐことはできなかった、と報告している。完備された党組織をもつても全国的な労働党の敗北の波を防ぐことはできなかったのである。

労働党の大衆党員及び大衆組織について、労働大臣でありかつ党組織委員長であったガンター氏は、一九六六年始め党本部に集まった約二〇〇名のフルタイムのエイジェントを前にし、つぎのように語った。

ガンター氏は質問や討論にこたえて、現代の状況に於て、旧い伝統的な党基盤からはなれるべきことをとぎ、党の組織は現代進行している革命的な状況から切りはなされえないとした。

労働党のバックボーンであることを常とした炭坑夫や鉄道員の組合のような古く大きな組合が先細りになり、これに反してホワイトカラーや技術者たちの新しい組合（それらのもののあるものは、TUCには加盟しているが、労働党に加盟していないのだが）の力は増大しつつある。ホカイトカラーやホワイト・コート労働者に訴えるためには、党の訴える仕方を変えねばならない。

ドグマ的社会主义の時代はすぎ去りつつあり、左派的傾向をもつ諸集団は新しい系列化をとりつつある。このことは、組織方針のなんらかの基本的な再検討をいみしているし、また多分、党員を獲得するための仕方について新しい見方をして行くべきことをいみしている。そして、もはや労働者の支持を当然のことと考えることはできない。

新しい団地に住み、テレビセット等々を備え快適な生活をいとなむ人々は、労働党に加入すること、いや、いかなる他の組織にも加入するようになかなか説得されえないのである。

しかしながら、彼らはテレビで政治家たちをみており、おそらく大部分の選挙区では組織というものは比較的に重要ではなくなりつつある。組織が決定的に重要なのはマージナルな選挙区においてのみであるときえいえるであろう。エイジェントたちは、資金と努力をこうした選挙区に集中しなければならなくなるであろう。

つまり、ガンター紙によれば、労働党の支持層やその性格は変わりつつあり、新しい型の下層中産階級あるいは新し

い型の「労働者」が旧い型の支持者にとって変りつつあるというのである。彼らは一般に党组织になじまず、伝統的な組織の仕方や党費の徴集の仕方は彼らには有効ではない。むしろ党費徴集についてはなんらかの新しい方法を考えなければならぬとしても、党组织というものはやはりそれほど依存できない。組織づくりの困難な現代では、その努力は限界選挙区に限って集中的に行なわれるべきだというのである。ガンター氏のことばは、大衆の党组织化が重視された時期に育ち、自分たちもそのために任ぜられさえしたエイジェントたち⁽⁴⁾にとっては、公おどろくべきこととみられたのであった。現代大衆社会化の傾向は、大衆の政党组织化の時代をもちや通過してしまったのであろうか。

第三節 党委員会

この町の保守、労働いずれの党においても、党活動の主体は大衆組織ではなくて、委員会ないし委員であるといつてよい。この節では党委員会について説明しよう。

いずれの党においても、委員会には議長・書記・出納の三役がおかれ、各役員は二つの党で相違はあるがいずれもかなり明確に定められている。保守党の役員は三つの役で一名ずつ、計三名で、これらの役員が党组织・活動の中心になっており、彼らがどういう人物かによって党の性格はかなり大幅に左右されるように思われる。これに対し普通の委員はそれほど明確には定められているわけではないし、また委員会の活動も労働党委員会に比べてそれほど活潑とはいえない。六六年選挙当時はとくにそうであった。労働党委員会においては、議長及び書記は各一名、明確に定められているが、出納には数名の委員がなり、党費を集めて廻る大体の地区を割り当てられている。ここからもわか

るように、労働党の組織・活動は保守党の場合よりも、より多くの委員ないし委員会を基盤にしている。従って、誰が委員であるかも比較的明確に定められており、つぎにのべるようなかなり重要な留保を附してであるか、労働党委員の数は一四名から一六名ぐらいであるとみてよい。保守党の委員は一二名から一六名ということになる(以上六年調査)。

普通の委員が誰であるかは、党員の場合ほどではないが、それほど厳格に定められているわけではなく、従ってまた委員数がなん名かもそれほど明確ではない。このことは労働党の場合でさえもいえる。毎月の労働党委員会の通知も委員にだけではなく、二〇名ぐらいの党員に出されており(七〇年調査)、そのなかには委員でないものも含まれている。両党の議長でさえ委員の数が——勿論「知らない」からではなく——「なん名だとはっきり云うことはできない」と云うのである。「では、誰が委員ですか」ときくといずれの議長も一人一人名前をあげてゆき、一四、五名になったとき、「それぐらいではないか」というぐあいである。労働党議長によれば、委員かいなかは「黒と白のように分けることはできない」のである。公委員に頻繁に出席するものは誰かと質問するなら、議長は一人一人名前をあげてゆくことができるし、そうした人びとをかりに公委員とみることができるかもしれないが、これは公勝手な規定になってしまう。実際委員かいなかの限界線は公頻繁にということばの曖昧さと同じぐらい曖昧である。委員が誰かは明確に定められていないのであり、それを定めることも、ありえないほどの例外的な場合でもなければ、なんら実益がないのである。委員自身にも自分が委員であるかどうかはつきりわからないものもある。過去一年間開かれた委員会のうちその半数ほどに出席していたある婦人委員は自分が委員であるかどうかをはっきりと答えることができず、私が彼女に「議長があなたを委員とっていましたか」と云うと、彼女はほほえみをもらしたのである。これは彼女の控え目な態度の現われかもしれないが、実は右のような理由があるからである。特別の機会

でもなければ自分が委員であるかどうか確めるのは困難であり、必要もないのに自分が委員かどうかをきいてみるのはセンスのある行ないではなからう。

誰が委員であるかが曖昧であるということは、委員を正式に選ぶ党員の大会がないためということもできよう。しかし、委員たちを党員大会で選ばない地区政党はかなりあるのである。そもそも党員大会を開く地区政党はそれほどないであろう。従って委員たちは別の公インフォーマルな方法で、普通は公互選で、選ばねばならないことにな⁽²⁾るが、こうして選ばれる委員には公インフォーマルな性格がつきまといざるをえないのである。にもかかわらず、委員は公適切に選ばれ、公委員会⁽³⁾は十分によく機能しており、委員かいなかを公黒か白か⁽⁴⁾のように分けてしまわない方がかえって柔軟にうまくゆきさえするのである。それはなによりも英国におけるクラブの伝統にもとづいている。

ある委員は個人的に知り合っている人に委員会に出席することを勧誘すべきかどうかを、まず判断するであろう。問題ないと判断すれば、彼は他の委員にインフォーマルに相談し個人的に彼を紹介するであろう。彼らが適当と判断すれば、名前を委員会に紹介し、委員たちが出席を了承するなら、紹介者は自分で新来者に公委員⁽⁵⁾会に出席するよう勧誘するであろう。こうして新来者は会に頻繁に出席し、やがて書記から手紙で会の通知をうけとるようになるであろう。しかし、彼が公正式の委員⁽⁶⁾とされているかいはわからないのであり、単なる党員として公オブザーバー⁽⁷⁾の資格で出席を許されているだけかもしれない。会に出席していることは委員かいなかの二者択一的な条件ではない。彼が討論によく加わるようになっていなくてもある。実際公正式の採決というものはないといってよいのである。会によく出席しよく討論に加わり、やがて彼の意見や性格が十分に知られるようになる。彼も自然に会のなかに融け込むであろう。こうなるためには時日を要し、この間に新来者は主義・意見・熱意・性格等を判定されるのであ

る。労働党においては主義や政治的情熱はより重視されるであろう⁽³⁾。しかしそれでも新来者の公ソシアルな性格、彼が委員として他の委員と行動をともにしてゆく適性をもっているかどうかは、それに劣らず問題にされよう。小さい単位の党組織である地区組織では委員会はとくにクラブ的性格をもつのである。判定にどれぐらいかかるかは一律にはいえない。私はそうした吟味をうけている労働者と知り合った。彼は三、四回ほど続けて労働党委員会に出席するようになったが、彼自身自分が委員かどうかわからないでいたし、議長は彼を委員のなかに加えていなかった。これに対し、婦人労働党委員（後述建築設計士）は委員会に出席し始めてから三、四カ月で委員に加えられる。新来者が委員を認められ、そう扱われるようになって、そのことについて改めて正式の議決があり決定がなされるというわけではない。いつとはなしに公自然にそう扱われるようになるのである。委員として扱われたことを知る最もよい機会は、委員にふさわしい党務を割り当てられたということであろう。判定の過程で、あるものは委員として不適格とみられるようになる。しかし彼はもともと委員として議決されたのではないから、議決をとり消したりそれを彼に知らせるやるといふ必要もない。彼は他の委員から自然と疎まれ無視されるようになるだけである。やがては委員会⁽⁴⁾の通知も出されなくなろう。彼も委員会に出席して気まずい思いをするよりは自から退いた方がよいと考えるようになるのである。既に委員と認められていたものが委員会からはずされて行くのもこうした過程をたどらう。私はこうした人——彼は前書記であった——が会から遠ざかってゆくのをみた。多くの委員は彼の行動が不適切——後述——であると判断し、そのことをインフォーマルに知り合っており、正式に除名の決議はなされなかったが、事実上委員会から遠ざけられたのである。

委員会の組織は形式的なものではなく、実質的で極めてパーソナルなものである。イデオロギーへの極端な情熱がそれほどない限り、また委員になりたいという野心家があり余るほど多くはない限り、また委員の数を正確に数えて

早急に採決し決定しなければならぬ問題が起こらない限り、こうしたあり方で十分であるばかりか、それはセンシブルであると考えられているのである。事実、イデオロギーへの情熱や政治的野心はそれほど極端ではないし、地区レベルの党には採決によって決定しなければならないような深刻な問題は起らない。こうして少なくともウッドストックの政党組織に関する限り公官僚制的な形式（合理）性はないといつてよい。新左翼の人たちは労働党組織を批判するときに、しばしば公官僚的という言葉をを用いるが、もしそれが形式的手続きで事務的に事を処理してゆく官僚機構をいみするならば、それは当たっていないであろう。しかしもしそれが容易にbreakthroughできず滲透できないならイスタブリッシュメントをいみするなら、それは当たっているといえるであろう。党組織は閉じられてはいないが、新来者（一般黨員）は単にイデオロギーや政治的原則に対する捧身だけでは、そうたやすくは委員員になれないのであって、ながいインフォーマルな吟味をパスしなければならないのである。政党は政治原則の共通性によって結ばれているが、英国の伝統的なクラブの組織と運営の伝統の上に立っているのであって、それは他のすべてのクラブと同じように、チームの一体性のためによりもソシアルな態度、マナー、健全なコモン・センスを重んずるし、また抽象的な機構への捧身とやらんでパーソナルな結びつきの要素も重視するのである。

委員会はよく開かれる。保守党は年五、六回であるが、労働党は毎月開いている。労働党の場合には会の通知は委員を含め二〇名ぐらいの黨員に出され、従つてこの会は最も厳密な意味では委員会ではなく、黨員集会の性格をもっている。保守党はときどき個人の家で委員会を開くが、普通は二党ともパブで開く。開催中もアルコールを欠かさず、それは雰囲気を活潑にしなごやかにするのである。会に集まるのは委員たちの一部であり、労働党委員会では毎回一〇名ほどであった。七〇年調査の当時ではやや少なく「八人ぐらい」（書記による）か「八人以下」であった。会は晩、普通七時ないし八時頃から二時間ほど続く。労働党の場合をとれば、最初の一時間は種々の報告から始まる

としても、討論は極めて活潑である。私が出席した会合（一九六六年）では、ローデンシャ問題、ベトナム問題等国際的な問題さえとり上げられた。こうした大きな問題では議論は「概念的」になってしまふ。例えば他の問題の処理では極めてリアリスティックな発言をしていた書記——レストランのマネージャー——も、ベトナム問題を「ファズムかコミュニケーションか」というように単純化してしまふ。これに対し、最も活動的な婦人委員も「それならコミュニケーションの方がよい」とこたえるという具合である。七〇年調査においても同じようであつて、討論の時間はやはり半分の一時間ほどで、しかも討論は地方的な問題よりも全国的な政策について行なわれている。オックスフォード大学のフェローであるある労働党委員によれば、「これは英国では普通ではなからう」というのである。彼はその理由を「この町では地方的な問題について議論をしても労働党はどうせ町会でマジョリティをうる事ができないから」とする。こうして、委員たちは大きな問題についての公政策論を議論しその質は高いものではないが、彼ら自身討論の質が高くはなく、またたとえ熱心に国の問題について政策論を戦かわせても自分たちの意見が党指導層の政策に遙かに及ばないことを十分心得ている。国の政策について討議しこれを上級の党組織に提案するなどということはまず考えない。こうした討論は議決するためではなくて、党指導層の政策をとるに公学習をみる機会とみていい。そして一般的・抽象的な形でしかなされえないこの議論のなかで、それぞれの委員たちがもっている政治原則や党への忠誠を確め合い安心し合うのであろう。またなによりもビール片手に討論をするのは彼らにとってこよなき楽しみのある機会なのである。およそ地区組織での討論というものは——選挙区組織ほどにも——正式の議決をとまなう党務とはならないのであつて、気楽に公耽りうるものなのである。より大きな党組織では——グロソップの場合さえそうなのだが——正式な議決はなにがしかは要求され気楽に討論にばかり耽りえないのであろうが。

大きく重要なテーマが論ぜられるときに比べ地方的な問題が論ぜられるときには議論は極めて具体的でこまかくか

つ極めて非政治的・非党派派である。この場合には討論はしばしば結論を求められ、この結論が町の方針として採用されるのである。しかし、決定は機械的な多数決によって行なうのではなく、意見の不一致や意見をもたないものがあれば、委員たちはながい時日をかけ、フォーマル及びインフォーマルな機会を利用して一つの結論が無理なく出るように計ってゆくのである。

六六年調査当時町の労働党委員会によってとり上げられた重要な問題としてはつぎのものがあつた。

町を貫通している国道A三四号線道路での信号灯設置。町のどの部分に設けるべきか、設けるためにいつ、誰に、どのように働きかけるべきか、事項は労働党政府によって扱われることになるが、労働党政府に現在（経済的逆境の時期に）働きかけることが党組織の一環にあるものとして適当かどうか、ということが議論された。技術的な問題については△楽しい▽討論がなされたが、政治的な側面ではやや深刻な論議があり、書記は「現在政府に圧力をかけることは国の財政の状態からみて政府を困らすことになり、もう少し時期を先にした方がよいのではないか」という意見をのべた。彼とともに委員のなかで有力である町議の医師夫人は「信号を設けるかいな」ということは△政党の問題▽（△party matter▽）ではないとし、もう一人の有力な委員（後述職場幹事をしている労働者）の支持をえて、結局町会を通じて政府に働きかけるという方針が決定された。

水泳プール建設計画の決定。町の労働党はみずからイニシアティブをとって町にプールを建設するという決議をなし、その推進者としては、すぐ前にのべた職場幹事の労働者——彼はユース・クラブのリーダーでもある——と医師夫人の夫を決め、これによって二人は町会に働きかけるとともに、特別の基金徴集の運動を始めることになった。この小さな町ではこれは極めて「遠大な計画」であり、事実七〇年調査当時もつづけられ、このときには△町ぐるみの▽の運動となっていた。職場幹事は運動の委員会の議長をしていたが、労働党の運動から切りはなされ、町長始め多くの△保守的な▽人たちも積極的な役割を演ずるようになり、美人コンテストを行なったり、全ヨーロッパから選手を招いて町のなかをコースにした競輪大会を開いたりして、運動は非常にはでになった。

町の境界拡大問題。町の労働党が手がけ始めた第三の重要な計画は町の領域の拡大であり、推進者は測量技師の若い委員であつた。彼は町民に郵送したパンフレットのなかで「境界線の拡張を急ぐべきであるということ」というテーマの下に、その理由をつぎのように説明している。

ウッドストック労働党は、歴史的ではあるが、現在全く時代おくれとなったバラリーの境界に関し、現在まで慎重に検討してきた。このメモランダムを配布して、ウッドストックの拡大に関し我々が提案したことがらについて研究を促したい。関係当局ができるだけ早くこの問題に関心を向けることを望むからである。

現在旧きウッドストック・バラリーは一五七エーカーしかなく、有権者数も一三九六名にすぎない。町の境界は狭く、極めて多くの人が町の周辺に急激に膨脹しており、彼らはバラリーから種々の便宜を得ようと望みながらバラリーの外に住むためにそれを十分に得られないでいる。バラリー内の人びとと、周辺に住む人では地方税も異なる。……ここに提案するグレイター・ウッドストックは現在の有権者の数で約二五二五名、三七五〇エーカーの面積となる。うち二三一〇エーカーはブレインイム・パレスである。

こうして拡大によって克服しうる行政上の不都合は、住宅問題、道路、ごみ捨て、下水、街燈、選挙、町議選、地方税の八点であるとする。内容は細部に亘るため省略するが、簡単に重要な一例、住宅問題についての叙述だけをここに引用しておこう。

バラリー内に土地がないため、公営住宅の建設はバラリーの外でなされねばならず、このため「隣り村の」チップング・ノートン・ル
ーラル・デストリクト村会に地方税を支払わねばならない。

町の公式の党活動の中心は委員会であり、委員個人個人の政治活動もこの組織を基盤にして行われる。しかしながら委員会の規律はそれほどきついものではないし、委員たちもこれによって機械的に規制されているわけではない。個人の委員にはかなりの公自由が~~あ~~あって、このため彼らの党活動にはかなりのバラエティができる。六六年選挙において町の労働党は戸別訪問すべき地区を委員たちに割り当てたが、割り当てられた地区を熱心に訪問したものもあるし、また殆どしなかったものもある。あまりしなかったものはインフォーマルに非難はされるが、委員それぞれ事情で大幅な寛容が示されるのである。

委員相互の関係もそれほど密接ではなく、公機械的正確さを~~も~~もって連絡がとれているとはいいがたい。とくに横

の関係はそれで、例えば労働党においてさえ、委員同志が他の委員の戸別訪問活動の状態をそれほど知っているとはいがたいのである。⁽⁸⁾委員相互はどれぐらい密接な関係をもっているであろうか。これを検討するために委員たちがどれぐらい他の委員の名を知っているかをみてみよう。まず労働党委員から始めよう。労働党議長は委員の名を一四、五名あげたが、他の委員はこのうち何名の名前をあげることができたであろうか（六六年調査による）。有能な書記は勿論一四、五名の名前をすべてあげることができた。委員会に欠かさず出席している彼の妻も大部分である一二名の委員の名前をあげることができた。委員のうち最も活動的といえる医師夫人も全部の名前をあげることができた。上述のバラー境界拡大問題を担当している委員で、六六年調査当時町に移ってきてからまだ一八カ月しかない三四才の測量技師（テレグラフ紙講読）。彼は最近一年間に委員会には五回ほど出席したし、六六年選挙のときには戸別訪問はしなかったが、労働、保守両党の公開演説会には出席した。彼は委員の数は一〇名ほどとしているが、うち名前をあげたのは七名だけであった。

かつて病院に勤めていた（看護婦？）が一二年前に町に移住してきた未亡人（ガーデアン紙）。委員会には最近一年間五、六回出席した。総選挙のときにも活動的で、労働党の公開演説会に出席したし、戸別訪問にも三回ほど加わり、投票日には労働党側の立会人にもなった。にもかかわらず、彼女は委員の名を五、六名しか挙げることはできなかった。「議長があなたを委員だといっていました」と聞いて喜んだ例の委員である。

一年前に移転してきた年二〇〇〇ポンドほどの収入をもちガーデアン紙を読む四〇才の建築設計士（ミス）。委員会には出席し始めてから欠席することなく（四回）出席した。選挙のときは労働党の公開演説会に出席したし、二回ほどだが戸別訪問にも加わった。しかし彼女は議長とドクター夫人の二名しかあげることができず、書記の名も知らなかった。

七〇年調査当時は委員ないし委員の数はより曖昧となっていた。職場幹事の労働者が議長になっていたが、彼によ

ると、公委員▽といえるものは一〇名ほどである。ところが、有能な書記によると一二名から一五名ほどであり、またオックスフォード大学のフェローである若き労働党委員によれば一〇名ほどである。この若きフェローは町に移ってきてから三年で、委員会には最近一年に六回ほど出席しており、彼が名前を知っている委員は六、七名であった。前に公委員▽として公吟味▽されているといった労働者は委員として認められるようになっていた。他方、三名の委員は七〇年調査当時は抜けていた。

保守党委員をみよう。六六年調査当時、議長は委員として一二名から一五、六名の名前をあげたが、委員たちはどれぐらい他の委員の名を知っているであろうか。

党書記は戦争直後から町に住み、オックスフォードで仕事をしている家具デザイナーの妻（五四才）である（カトリック、デイリー・メール紙）（彼女はユース・クラブの書記であり社会的にも活動的である）。選挙のときは保守、労働両党の公開演説会に出席したし、窓にはステッカーをはった。もともと戸別訪問は一度もなかった（！）のであるが。書記として毎回委員会に出席し、彼女があげた委員の数は一四名で、議長があげた人数と若干の違いはあるが、ほぼ一致している。

つい最近まで党の財務委員で保守党委員のうちで最も活動的といわれてきた七四才の看護婦（テレグラフ紙）。総選挙のときには保守党の公開演説会に出席したし、窓にステッカーもはったし、戸別訪問もした。彼女の家で委員会が開かれることもしばしばであったし、委員会には欠かさずに出席した。しかし彼女があげた委員の数はわずか六名にすぎなかった。

夫が公爵のエイジェントである四七才の婦人委員（テレグラフ、メール紙、タイムズ、イクスプレス紙、町にきてから一三年）。委員会には最近一年間四回ほど、つまりほとんど毎回出席し、総選挙のときには保守党の公開演

説会に出席したし窓にはステイッカーもはった。しかし彼女が自信をもってあげた委員の名は五名もいなかった。彼女の夫は七〇年調査当時は保守党議長になっていた。

六六年調査において、会って他の委員の名を改まって質問することができた保守党委員は以上四名の委員であった。労働党委員の場合に比べ、委員間のコミュニケーションはかなり悪いといえるが、他の委員との普通の会話のなかでえた印象でもやはりそうであった。

以上のことからわかるように、委員間の相互関係は、完全であることからはほど遠くそれほど密接ではない。労働党にしているからがそうである。委員会がグループとして維持され委員がグループ意識をもつとしても、委員相互の密接な関係によるとはいえないであろう。

保守党においては、集団的な活動よりも委員個人の活動が目立っている。例えば党費徴集は、労働党においては委員たちに地域的に割り当てられるが、保守党では財務委員に大部分の負担がかかる。前財務委員はながい間その役にあり、一人で半数以上の党員から党費を集めたし、一人で一〇〇名からの党費を集めたことさえあったという。七〇年調査当時は保守党書記は極めて活動的であり、近來の党勢拡大は彼女の努力に負うところ多大であった。六六年調査において「現在活動的なものは誰か」について質問したが委員たちからはなんら確答をうることができなかったし、前財務委員によれば「誰も活動的なものはいない」のであった。この質問には保守党委員たちは活動的な委員個人の名前をあげることせず、「議長はだれ、書記はだれ、財務はだれ」というように、役についている人びとの名前をあげるのである。このこたえが役職にあるもののリーダーシップを強調したもの——一般的に保守党の場合にはたしかにリーダーシップは強い——か、それともそれ以外に理由があるのかには、計り難いものがあるが、一つには、委員たちが現に誰が活動的なかをよく知らず役職にあるものは活動的なはずだとして、とにかく役職にある人

の名をあげたということにもよろう。保守党の場合には集団的な活動というものはそれほどないのであって、そのた
め活動的なものが誰かを実際に知る機会がなかったのである。筆者が見た限り、六六年調査当時は議長が最も活動的
であるように思われた。「誰が最も活動的ですか」の質問に彼の名前が直接あげられないのは、うえのような理由に
もよろうが、議長の場合には彼の強い性格に対するあるていどの反感があるためかもしれない。彼はかつては町で最
も活動的な青年保守党員であり、五〇年代には若くして二度も町議として選出されたのであるが、一九六一年に落選
してしまつた。それ以来四〇才前後の若さであるにもかかわらず町議に立候補していない。カイゼルひげをはやし
た行動的な建築業者である彼は、ある保守党町議によれば「ひとにあまり相談しないで一人で事を進めてしまふ」
（《Bamptious》）タイプの人物であり、このため「ある人びとからは反感を買ふ」ようになったのである。私には
極めて親切であつたが。彼のほかには前財務を除けば、六六年調査当時はそれほど活動的なものはいなかつた。
書記は総選挙で一度も戸別訪問をしなかつた五四才の婦人であつたし、他の婦人委員のごときは、私が面会を求めた
とき「私は政治には関心をもっていないし政治のことはわからない」といつて三名が面会を拒否した。このなかには
前書記の老婆一人が含まれており、彼女は「政治のことはわからない」といいながら、議長や書記の名をあげ二人の
家に行くようにと△アドバイスをしてくれたのである。

労働党委員たちは保守党委員に比べれば、より集団的な行動をとつているといえるが、委員相互の關係はそれほど
密接とはいえないし、活動的な委員とそれほどではない委員との活動の度合の相違も相当に大きい。労働党は委員た
ちの活動をきつく規制する全体主義的政党ではないのであって、委員たちには活動についての大巾な自由があるので
ある。私は「誰が最も活動的な委員か」と質問してみた（六六年調査）。これに対する委員たちの回答は保守党委員
の回答と違い、すべて誰それと名をあげるようなものであつた。あげられた名は、医師夫人、書記の名、議長の名の

三名に集中され、しかも医師夫人をあげないものは一人もいなかったのである。ちなみに医師夫人は町議であるが党内の役職にはついていない。労働党は委員会を基盤に活動し、この点役員中心に活動している保守党と違いはあるが、活動的な委員は労働党においてもいく人かに限られているのである。このことからすれば、二つの党の相違はより小さくならう。にもかかわらず、労働党委員会は保守党委員会よりもよくまとまっております、しかも委員相互のコミュニケーションその他の関係はそれほど密接とはいえないのであるから、委員会のまとまりはこれら少数の活動家大いに依存しているといわねばならない。活動的な委員は誰かについての回答が殆ど一致していることもこのことを立証するであらう。こうして、少なくとも六六年調査当時、労働党委員会は活動的な二、三の委員を中心によく統一のとれたグループであった。これに対し保守党は一、二の活動的な委員はいたが、それほどには統一がとれていなかった、とみることができよう。

パーソナルな性格、インフォーマルな性格、ボランタリーな性格等、総じて英国のクラブにもみられる性格はウッドストックの政党の特徴をなしていることができる。こうした性格は英国の政党組織にどの程度共通するであらうか。たんにウッドストック（あるいはウッドストックのような小さい町）の政党組織にのみ限られるのであるか。大都市での政党組織・活動がそれと違ったものであることは否定できないし、この町と同じく州選挙区内にあるものでも、より大きな町あるいはより小さい村落での政党もそれと違うであらう。労働党は地方党组织のモデルを定めているが、この町の労働党组织はそれとはかなり違い、はるかに単純である。しかしながら、少なくとも選挙区政党よりも小さい単位の地方・地区党组织には一般にこの町の政党と共通した性格があるのではなからうか。町の労働党の党组织が全国的なモデルとは違っているとはいっても、このモデルに合致する地方・地区政党はそれほどないであらう。グロソップにおいても「グロソップ労働党は全国労働党により定められたモデル・ルールを採用しな

った」であり、⁽¹⁾ 公非正統的な組織なのである。六〇年代前半でのウッドストックの労働党と六〇年代後半での町の保守党は、英国においてよく組織されたそれぞれの党の地区組織のタイプであり、かなりの一般性をもつとってさしつかえないように思われる。本論文の趣旨はなによりも、モデル・ルールとは別の、現実の機能をみようとすものである。

政党、とくに党活動家の組織としての政党はなんらかの政治原則にもとづいた集まりであり、これなくしては政党はありえないであろう。しかし政党は政治原則への捧身にのみ依存し、それによってのみ組織され行動がなされるわけではない。政治原則への情熱の昂揚によって、一時的には人びとは他の一切のことを忘れて集まり共同行動をとることができるかもしれない。しかしそれはなが続きしないであろう。政党内の行動様式は英国においてはあるいみでは厳格であるが、それは政治的情熱の不断の昂揚を前提にするものではなく、またその厳格性は公全体主義政党⁽²⁾がもつような集団主義的規律の厳格さでもない。政党活動におけるボランティアな要素は極めて強く個々のものが自由に判断し行動しうる範囲はごく広いのであり、委員会やその役員も党員は勿論のこと委員さえもそれほど厳格かつ直接に規制しようとはしない。委員たちは互の行動を監視し合っているわけではないし、またそれほどひんばんに連絡しているわけではない。議長や役員でさえも委員の行動を能率的に把握しているわけではないのである。英国の政党の組織と活動を支えているのは国民のなかに深くしみこんでいる公クラブ⁽³⁾の伝統なのである。

英国の政党は一種のクラブであって、その組織や運営はクラブにおける伝統的な組織・運営のコモンセンスやマナーに従ってなされるといってよく、それを律しているのは一般のクラブ会員を律しているのと似た仕方である。政治原則への情熱のためにときとしてこのマナーを破ることは許されよう。しかししばしばそれを破るものは、いかに党への情熱に燃えていようと公奇妙な人物⁽⁴⁾として疎まれてしまうであろう。⁽⁵⁾ いかなる政治的情熱も一般の社会で重ん

ぜられている行動の通念を破りえないのである。労働党においてさえも、党の組織・運営には少なくとも党の公式的な組織・活動とは違った側面があり、クラブ的な側面やインフォーマルな側面をみることなくしては理解できない。ある研究者は、保守党組織についてつぎのようにいつている。⁽¹⁴⁾

保守党協会はおそらくはなによりも社交団体であることを忘れてはならない。それは正しくも「政党」とよばれず「協会」と呼ばれている。この社交団体は明確に中産階級の雰囲気を持ち、中産階級のクラブの趣味や価値観をもつものは誰でも確実に歓迎される。協会は閉鎖的な社会ではないのである。他方、そうした趣味や価値観をもたないものは、意識的な決定によって阻止されることはないが、喰違ったマナーで行動しそのために気安くなれないということになって疎んぜられてしまうことになる。

こうしたことは保守党に限られない。グロソップを調査した著者は、政党組織・活動につき第一にあぐべき特徴として「三つの党はいずれも本質的にソシアルな組織であつて、党員は総選挙や地方選挙で必要に迫られるまでは政治活動に向わない」ということをのべている。⁽¹⁵⁾

ウッドストックの保守党は、とくに六〇年代の前半、活動家の個性的性格が強く、議長は公ひとりで事を進めてしまふタイプ的人物、財務は一人で百名もの党員から党費を集めて廻るような婦人であった。保守党の場合には概して活動家の個性的性格がやすいのであるが、当時の保守党はこの点でたしかに公行きすぎがあつたであらう。全国的な劣勢にあつて一般の委員が党活動にそれほど熱心ではなかつたという事情はあつたであらうが。

労働党は保守党よりも確かに公政治的に活動的であるということが出来る。この点ではグロソップの労働党の例はむしろ公少ないケースに属しよう。ウッドストックの委員会の会合は、保守党では二、三カ月に一度ぐらいしか開かれないのに対し、労働党は毎月会合を開き、集まりも労働党の方がよく政治的議論も労働党の方がはるかに活潑

である。労働党の場合に公よき会合といわれるのは、できるだけ多くの人びとが集まりできるだけ活潑に政策についての議論がなされるということである。これに対し保守党は公ソシアルな面を強くもち、会合が公成功したかどうかの評価も公ソシアルな雰囲気がつくられたかどうかによるのである。労働党はまた組織も公民主的の事である。党役員も、集まる党員がごく限られるため選挙によって選ばれることはまずなく、保守党の場合と同様に事実上委員会内で公インフォーマルに選ばれてしまうが、それでも観念として、できるだけ民主的に選挙さるべきだという意識は維持されているのである。にもかかわらず、公民主的なこととは労働党の場合においてさえ、単に機械的な多数決を意味しないのであり、全員一致に向って忍耐強い努力のプロセスが重要とみられている。

こうしたことは、ロンドン市内の一選挙区グリーンニッチ調査にもみられる。この保守党も選挙のないときには会合をできるだけ減らし、政治にできるだけ遊びや社交の面を加えようとする。舞踏会、晩さん会、ウィスト・ドライブ、ガーデン・パーティ、ピクニック、これらのもよおしはこの保守党もよく用いる公ソシアルな機会であり、その主たる目的は「この機会を利用して政治的情熱を昂揚せしめることではなくて、「好意と財源」を獲得するためなのである。こういう機会を別にすれば、地区の支部が集会をもつということは余りなく、五〇年調査当時の最も活動的な地区でも会合は年四回ぐらいであり、なかには年一度しか開かないところもかなりあったのである。こうしたところでは党活動を組織する重荷はとくに小委員会にかかってくる。労働党の場合にはこれに対し、役員の数をやしてできるだけ多くの人びとをそのどれかにつけようとする。各地区組織は少なくとも月一回は会合を開いているし、党員は全部招待される。公よき会合の指標は、できるだけ多くの人びとが集まって討論に加わり、全国的に重要な争点について党政策を論じそれを変えたり強く支持したりすることとされる。もっともこうした会合に出席しうるのは普通党員のごく一部にすぎないのであるが。

活動家の組織はインパーソナルなものではないし、指導層もインパーソナルに組織を運営してゆく冷たい管理型・官僚型の合理主義者ではない。党組織・活動の中心になる人たちは（パーソナルにも組織を運営し事を処理できる）
 公人間的で暖かく公ナイス・マンでなければならぬ。党組織は単に党規約にもとづく冷たい機構的な組織ではなくてよりパーソナルなクラブの結合である。ある選挙区労働党組織について調査したある著者は「炭坑地区やバラ
 ーの労働党優位地区においても、規約の厳格な遵守よりも個人的接触はより重要な役割を果している。労働者のクラブや普通のパブさえしばしば党活動の中心になっている」としている。⁽¹⁹⁾
 こうした党組織は、ややもすれば外部に対して閉鎖的になり、自律的ではあるが、停滞的にとじこもってしまい、外部からの政治的情熱の導入や強いリーダーシップの抬頭をさまたげることになりがちである。

自律性を保持しようとするこのような地方的集まりは選挙区レベルでの強力で、断固たるリーダーシップの抬頭を妨げている。選挙区政党的連合的性格は部分部分を十分にコントロールすることができないことをいみしている。……地区代表は自律性を擁護するが、議長はそれを攻撃することができない。彼は一度も党のマネージャーになろうとしたことはない。⁽²⁰⁾

また、パーソナルな接触が重んぜられる結果、党内に人間関係のネットワークの濃淡ができてしまう。一般にクラブは、目的的结合であって、この目的に沿わない行動は控えらるべきであり、いかにパーソナルな要素が重んぜられても会そのものなかでは個人の公好き嫌い¹は公節約²され、よりパーソナルな友人関係は抑えらるべきものとされる。とはいってもクラブ生活にも気にいったもの同志の友人関係はなにか反映せざるをえないのである。とくに重要なのは階級の相違から起こる問題である。英国のクラブの伝統において（さえ）異なる階級のものが同じクラブに属するのは困難なのであって、異なった階級のもの（とくにマイノリティのもの）は、よしんば入ったとしても

抜けてしまふ。^(註)これは党組織にもいえるに違ひなく、この重要な問題は稿を改めて取り上げる予定である。

英国の政党にはパーソナルな要素が強く、官僚的・形式合理的な冷たい機構ではないとしても、それだからといって、公派的な要素は十分に禁欲されており、直接にはそれほどでない。普通のクラブにおけると同様に、党の運営のなかにはパーソナルな要素は十分に禁欲されており、直接にはそれほどでない。それはコモンスンやマナーによって委員たちに嚴格に要求されているのである。階級をこえてはしばしば通用しないことがあるとしてもである。

ともかく、ウッドストックの政党に関する限り、リーダーシップの問題も、党の一体性の問題もそれほど深刻な事態を生んではいなかったといえよう。六六年調査当時、保守党はそれほど有効なグループ活動をしておらなかったが、保守党は元来役員の活動によつて運営される性格の党なのである。七〇年調査当時保守党は大いに勢力をもちかえしていたが、それも多くは役員たちの努力によつていた。他方、労働党の場合には、六〇年代前半に中産階級の活動家が増加し、このことがいままでとは違った性質の危機を生ぜしめたのであった。彼らは労働党が労働階級の党だとはみなくなりつつあるからである。こうした傾向に対して、労働者の前書記は抵抗し、労働党は労働階級の人びとの党であるべきだとして、なんらかの中産階級の委員たちに委員会への通知を出さないことまでしたのである。しかし現在は労働者の委員は中産階級の委員を公受けいれ、人数はいまは半分半分ほどで、一応の公妥協が成立しているように思われる。中産階級の委員は実際の党活動では労働者の委員よりも活潑であるが、彼らも議長は労働者から選んでいる。一般の黨員や一般の支持者はなお大部分労働者であつて、労働者の議長はより適切な公妥協の意味をもつとして、いるからにちがいない。こうした形で党内のバランスが保たれているのである。このことは後にさらにふえんするであらう。

- (1) ウッドストック投票区はウッドストック・バラード——これが《本来の》ウッドストックである——よりも大きく、バラードに近隣する他村の市街地を含んでいる。バラードの有権者数は六六年選挙当時では一三九六名であるが、投票区の有権者数は二〇〇一名であった。七〇年選挙当時の投票区の有権者数は二三一一名である。
- (2) マンチェスター地辺のグロソップ(ダービーシャー)においても地区労働党と地方労働党とは区別されていない。Birch, A. H., *Small-Town Politics*, p. 62. 以上の点はそれほど厳格ではないようである。
- (3) 一八八五年の選挙法改正によって、オックスフォードシャーの州選挙区は、オックスフォードシャー中部(ウッドストック)選挙区、オックスフォードシャー北部(バンベリー)選挙区、オックスフォードシャー南部(ヘンレイ)選挙区の三つにかえられた。この改正によってウッドストック選挙区は残されたが、つぎの一九一八年の改正によっては議席を喪失し、北オックスフォードシャー選挙区に合わされ、現在に到っている。
 ランドルフ・チャーチルはウッドストックから二度(一八七四、一八八〇年)立候補し当選している。一九〇六年の選挙においては、この選挙区でも自由党は勝利を占めたが、元来は保守党が強い選挙区である。この選挙区と合わせられた北オックスフォードシャー選挙区は一九世紀中ホイッグないし自由党が優位した選挙区であり、一九〇六年には勿論のこと、一九一〇年にも二度とも自由党の代議士を選出している。
 一九一八年《聯立自由党》が勝利を取めて以後は、北オックスフォードシャー選挙区(以前のウッドストック選挙区と合わされたもの)は常に保守党が勝利を取めてきた保守党優位の選挙区である。
- (4) Burner-Thomas, *The Party System in Great Britain*, p. 133.
- (5) タロンソンも同じ事情にあると思われる。Birch, op. cit., p. 65.
- (6) *Voting in Cities*, edited by Sharpe, L. J. 中の各都市の政党組織。
 ヌジマンルな組織一般の調査 Burner-Thomas, op. cit., pp. 148~152; MacKenzie, R. T., *British Political Parties*, p. 1, chap. IV, (iv), p. II, chap. VII, (iii).
- (7) Harrison, M., *Trade Unions and the Labour Party since 1945*, p. 118.

- (8) Report, Paras. 110~112. なる Report of the Labour Party Conference, 1957, p. 15.
- (9) 保守党においては、選挙区政党は「党務の処理において完全な自律性をも」となされてくる (Party Organization, p. 13; Interim and Final Reports, p. 28)。しかし、保守党の場合には党中央(中央事務局)からの相当強いコントロールをうける。 McKenzie, (op. cit., pp. 241~242, 540.) によると、労働党は「モデル・ルールによって、中央からのより強いコントロールをうけることになってくるのであるが。このモデル・ルールは長くは顔面通りには適用されていないし、また機能もしていないのである。」
- (10) Bulmer-Thomas, op. cit., pp. 204~210. 北オックスフォードシャー選挙区での候補者選択のプロセスについては別の機会に扱うつもりである。
- (11) Harrison, op. cit., pp. 111~113, 117: The Labour Organization, August 1954.
たとえば、五五年総選挙で労働党への得票が二万票のマジョリティをもっていた労働党優位のある選挙区において、GMCのメンバーは九〇名強であったが、このうち労働組合からの代議員は三〇ほどであった。他方、GMCメンバー二〇〇名のうち労働組合からのものが一四〇名もいる(ある限界)選挙区もあるのであるが。「実際には、労働組合はその数によって示唆されるよりも選挙区をドミニネイトすることはるかに少ない」(Harrison, op. cit., p. 117)のである。
- (12) Birch, op. cit., p. 168.
- (13) Harrison, op. cit., p. 116. ある選挙区の例をとってみよう。年四回のGMC会合に組合からの代議員はどれくらい出席しているであろうか。
- | | | |
|--------------|-----------|----|
| 四回とも出席したもの | 二 | 組合 |
| 三回出席したもの | 三 | 組合 |
| 一ないし二回出席したもの | 二三(合計二四回) | 組合 |
| 全く出席しなかったもの | 三六 | 組合 |
- Roberts, B. C., Trade Union Government and Administration in Great Britain, pp. 95~.
- (14) Blondel, J., Voters, Parties, and Leaders, pp. 99~100.
- (15) もっともこの点では選挙区をよほどかなり大きなバラエティがある。Birch, op. cit., p. 72.; Donnison, D. V. and Plowman, D. E. G., The Functions of Local Labour Parties, Political Studies, Vol. 2, 1954; Gould, J., Riverside: A Labour

Constituency, Fabian Journal, Nov. 1954 ; The Manchester Fabian Society, Put Policy on the Agenda, F. J., Feb. 1952 ; Rose, R., The Political Ideas of English Party Activist, A. P. S. R., Vol. 56, 1962.

こうした書物のなかでは国の政策についての議論は、がいしてあまりないとされているが、日本の場合と標準がちがっていることに注意すべきであろう。

- (16) この点については別稿で扱う予定である。労働党の場合にはのちのべるように(一一頁)代議員は派遣した母体である地方地区労働党の強い拘束をうけ、この点からもG.M.C.の一体性は制約をうけるのである。
- (17) この点についても、五節で扱う予定である。
- (18) Birch, op. cit., p. 47. グロソップでは選挙区政党のエイジエント以外に、パートタイムのエイジエントがいく人かいるのである。
- (19) Cf. Forward, No. 32, June 1964 ; New Advance, May-June 1964 ; Nairn, T., Anatomy of the Labour Party, N. L. R., No. 27, 28, 1964 ; Abrams, P. and Little, A., The Young Activist in British Politics, B. J. S., Vol. XVI. No. 4, Dec. 1965.
- (20) Croft, H., Party Organization, pp. 8~10 ; McKenzie, op. cit., pp. 246~248, 543~544 ; Bulmer Thomas, op. cit., pp. 144~145 ; Beer, S. H., Great Britain, Modern Political Parties, ed. Neuman, pp. 24~25, 43.
- (21) Blondel, J., The Conservative Association and the Labour party in Reading, Political Studies, 1958 ; op. cit., pp. 96~97.
- (22) Bulmer-Thomas, op. cit., pp. 144~145 ; Party Organization, pp. 8~10.
- (23) Donnison, etc., op. cit., pp. 160~161.
ロンドンやグリニッチ選挙区の労働党についても同様である。Benney, Gray, Pear, How People Vote, pp. 42~43.
- (24) McKitterick, T. E. M., The membership of the Party, P. Q., Vol. 31, 1960, pp. 319~320 ; McKenzie, op. cit., p. 547.
- (25) McKitterick, op. cit. 地区組織は労働党の場合においてさえも政策論よりも、選挙・宣伝活動がより重視されている。Model Rules Set A, pp. 13~14, McKenzie, op. cit., p. 546.
- (26) Rose, op. cit.
- (27) Churchill, W. S., Life of Lord Randolph Churchill.

- (28) 例えば、一九二二年アスキスがアイルランド自治法案を提出したとき、保守党党首のボナ・ロー始めこれに反対する統一主義者の下院議員約一二〇名と貴族約四〇名が集って大会を開いて激しい反対運動をもちあげたのはこのパレスにおいてであった。
 Blake, R., *Unrepentant Tory*, p. 130.
- (29) ロンドン市内のグリニッチ選挙区について Benny, *op. cit.*, pp. 50~51.

第二節 注

- (1) Duverger, *Partis Politiques*, Liv. I, chap. 11. Blondel, *Voters, Parties, and Leaders*, p. 90.
- (2) 選挙区で個人党员となつてゐるものは、労働組合員であれば大てい組合を通じた▲党员▽にも同時になつており、この分は控除されねばならない。
- (3) Butler, D. E., *Political Change in Britain*, p. 488.
- (4) Duverger, *op. cit.*, p. 90. ただし、加盟労働組合を通じて労働党に入つてゐるものを除けば、英国では支持者に対する党员の割合は一般に保守党の方が高い。このことは前に示した数字からわかる。
- (5) 一九七〇年の総選挙直後に有権者名簿から選んだランダム・サンプル(大きき一八一名)に面接して調査した結果である。
- (6) 前注(4)参照。
- (7) デュヘルジュは以下のべるような点について、十分認識してゐないように思われる。▲理念的に▽▲作業モデル▽(*op. cit.*, p. Ⅲ)によつてあまりにも▲割り切る▽彼の一般論は、少くとも英国の政党をとらえるには不十分である。Duverger, *op. cit.*, pp. 71~81.
- (8) デュヘルジュはこの点についての見方が十分ではない。
- (9) デュヘルジュはこの点についてはかなり詳しく一般論的に説明してゐる。*op. cit.*, 80~81.
- (10) この点についてもデュヘルジュは一般論的に説明してゐる。*pp. op. cit.*, pp. 73~74.
- (11) Benny, *op. cit.*, p. 46.

- (12) Bealey, F., Blondel, J. and Mccann, W. P., *Constituency Politics*, pp. 91~93.
- (13) *op. cit.*, pp. 94~95.
- (14) Butler, D. E. and King, A., *The British General Election of 1964* (以下 B. G. E. of 1964 等々と略す)のなかのフインチ
ホリーの項。
- (15) たゞえは、ワイルマンナーのチャックナムの例に同じくは Butler, etc., B. G. E. of 1966.
- (16) McKitterick, *op. cit.*, pp. 315~316; McKenzie, *op. cit.*, pp. 545~546.
- (17) *op. cit.*, p. 315.
- (18) Benny, *op. cit.*, pp. 36~37.
- (19) Butler, etc., B. G. E. of 1964, pp. 130~.
- (20) *op. cit.*; Abrams, P. and Little, A., *The Young Activist in British Politics*, B. J. S., Vol. XV. No. 4, Dec. 1965.
- (21) Rustin, M., *Young Socialists*, N. L. R., No. 9, May-June 1961.
- (22) Abrams, *op. cit.*; *The Young Voter*, in *British Politics*, B. J. S., June 1965.
- (23) Parkin, F., *Middle Class Radicalism*, p. 162.
- (24) *op. cit.*, pp. 163~164.
- (25) ヒュー・レフトの P・アンダーソンは、「一九六五年始め「この新しい現象の爆発的な力は伝統的左翼をとらえ、労働党の運動をまわつて、一時はその頂点をも襲いうるかにみえたのであったが、結局、衰退し、以来その勢力を回復してはいない」と云つてゐる (Anderson, P., *The Left in the Fifties*, N. L. R., No. 29, p. 11.)。 Abrams, P., *op. cit.*
- (26) アンダーソンによれば、「CNDは、その目的においてプロテスタト運動であつたのみでなく、その方法や組織においてもそうであり、政党の衰退や公的生活の官僚化に対抗して、自発性とデモクラーシーを純粹に主張し、自分たちを取りまく化石化した社会の生きた拒否であらうとした」(*op. cit.*)のであり、あらゆる面において組織や制度的固定化に対する反発であつたのである。彼によれば、△重苦しくむかつかせるような労働党官僚組織▽と、CNDの△気紛れで放浪的な既興性▽とは基本的に両立し難かつたのである。
- (27) ウッドストックにおいて六〇年代始め、新しいタイプの労働黨員、新しいタイプの労働黨員がふえたかど

CND に加わった人の階級

ホル・ジョーンズ分類法による階級	%
1 + 2	27
3 + 4	56
5 + 6 + 7	12
D. K.	5
100(N=358)	

Parkin, op. cit., p. 16.

うか確めることはできなかった。六〇年代前半に労働党活動家が伝統的なタイプの労働者から若い中産階級の人びとのタイプに移っているのを見れば、党員のなかでも多少とも同じような変化があったことは想像できる。

CND 運動はこの町で若い中産階級の党員をどれほど増加せしめたか明らかではないが、おそらく党員大衆の階級構成にながしかの影響を与えたにちがいない。ちなみにCND 運動に加わった人びとの階級構成をみると、全国的には中産階級の人びとが圧倒的に多く、労働階級に属する人びとは一割をこそにすぎないとされている。それに、下層中産階級の人びとが最も多いが、上、中の中産階級の人びともかなりいる。

(28) Mckittrick, op. cit., p. 317.

(29) このことは別稿で論ずる予定である。

(30) 後述二七頁参照。

(31) Cauter, T. and Downham, The Communication of Ideas, p. 602. なお、グリニッチに
 したがって Benney, etc., op. cit., pp. 47~48. 参照。

(32) Birch, op. cit., p. 80.

(33) Cauter, etc., op. cit., p. 101.

(34) Benney, etc., op. cit., pp. 47~48.

(35) Birch, op. cit., pp. 80~81.

(36) Bealey, etc., op. cit., pp. 250~251. マンチェスターの労働党も同様である。Manchester Fabian Society, Put Policy on the Agenda, Fabian Journal, Feb. 1952, p. 29.

(37) Benney, etc., op. cit. Bealey, etc., op. cit.

(38) グリニッチでは労働党員の方がよく出席する(二六%と三九%)とされている。Benney, etc., op. cit., pp. 49~50.

(39) Blondel, op. cit., p. 93. 次節参照。

(40) Harrison, op. cit., chap. 11. 保守党については、例えば Bulmer-Thomas, p. 135.

- (14) McKenzie, op. cit., pp. 545~546. McKitterick, op. cit., p. 314.
 (42) Butler, etc., B. G. E. of 1955, 1959, 1964, 1966.
 (43) B. G. E. of 1966, p. 263.
 (44) Party Organization, p. 19. 「一〇名あまりの地区委員会で満足するという古くさい考えにかえて、なん百名もの党員をもつ地区組織をいへり、初期の中樞政党の全エネルギーをもこえる活動を行うという現代的な観念がとらるべきである。」 McKenzie, op. cit., p. 547 参照。

第三節 注

- (1) Put Policy on the Agenda, Fabian Journal, Feb. 1952; McKitterick, op. cit., p. 316.
 (2) グリニッチ労働党の「役職はすべて選挙による建前である」が、グリニッチも殆ど互選といえよう。 Benney, etc., op. cit., pp. 49, 52.
 (3) グリニッチの場合にについては Benney, op. cit., p. 51.
 (4) Blondel, op. cit., p. 100.
 (5) 書記によれば、八人ほどであり、オックスフォード大学のフェローをしている委員によれば八人以下であった。 Dennis, Henriques, and Slaughter, Coal is Our Life, p. 67. 参照。 保守党と労働党でいずれが活動家が多いかについては Blondel, op. cit., pp. 93~94.
 (6) Birch, op. cit., p. 72.
 (7) Donnison, etc., op. cit., pp. 106~. 前注一節(15)参照。
 (8) ある委員が他の委員の活動について(総選挙のときの戸別訪問の例)どのくらい情報をもっているかについて調査を行ったが、これについては改めて論ずることにしたい。 結論的に云えば、やはり(労働党の場合でさえ)情報は多くはないのである。
 (9) 保守党の組織原則においては、▲リーダーシップ、責任、奉仕▼の精神が基本的に重んぜられ、政策論は労働党の場合ほどに

は重視されない。党支部の議長は△オーソリティ△を育成するよう勧告されるのである。若い党員の教育においてもとくにリーダーシップが重視され、△リーダーシップ△学校、△リーダーシップ△コースがつくられ、年々約三五〇〇人もの△潜在的リーダー△がこれに出席す(Abrams, P., op. cit.)。ウッドストックの議長も若い頃これに出席したことがある。

- (10) グリニッチの場合は、Benney, etc., op. cit. p. 49 を参照。
- (11) Birch, op. cit., p. 63; McKenzie, op. cit., p. 547.
- (12) この点についても、戸別訪問を例にして別の機会に論ずることにしたい。
- (13) ウッドストック労働党の前書記が疎まれ、党を辞めていった過程については三八頁参照。第三節でもふれる予定である。
- (14) Blondel, op. cit., pp. 100~101.
Potter, A. M., British Party Organization, P. S. O., Vol. 66, 1951, p. 85.
- (15) Birch, op. cit., p. 178; Put Policy on the Agenda, pp. 28~32.
- (16) McKenzie, op. cit., Introduction; Rose, S., Policy Decision in Opposition, Political Studies, Vol. N, No. 2 June 1956.
- (17) Benney, etc., op. cit., p. 45.
- (18) こうした会合に出席する人びとは普通党員中のごく一部にすぎないのであるが、グリニッチ選挙区などの地区にも「一〇人から五〇人ほどは自分の地区組織の事情をよく知り、互いの仕きたりになれ、余暇の一部を政治に捧げる習慣をもった活動家はい(op. cit.) のである。前注(5)参照。
- (19) Dennis, etc., op. cit., pp. 160~161; Hoggart, R., The Uses of Literacy 参照。
- (20) Dennis, etc., op. cit., pp. 163~164; Morris & Mogyey, The Sociology of Housing, pp. 147~148.
- (21) クラブ生活については別の機会に扱う予定である。
- (22) Blondel, op. cit., pp. 97~98.
- (23) ある論者は△ギャップ△は小さいとしている (Blondel op. cit., p. 101)。それは「地方労働党のリーダーたちの出身グループが保守党協会内で前者にでてくるグループとはかなり異なる」タイプのものである。しかし、労働者たちがドミニエイトする党組織に対する中産階級の人たちの忌避について Labour Organizer, July 1954 参照。「労働組合の支部からの代議員が一諸になって行動すれば、歯科医、教師、社会の幹部たちをブロック・ポートによって圧倒してしまい、いわゆるある種のインテリ

「たちが好んで行なう抽象的な政治についての曖昧な議論をぐらつかせることになろう」(TUC副書記長、V・フェザー氏談)。
現在では、かつてとは逆に▽中産階級の人びとは、自分たちが中産階級のものであることをためらいなく認め、労働党を彼らなりの観点から支持しており(英国のアマチュアリズムに挑戦する△テクニカル・インテレクチュアル▽の観点から)、彼らもつ能力によって党組織を動かそうとしているのである。この点から労働党組織の統一性は新たに問題にしなければならないようになつたと思われる。